

松原市文化財報告 第6冊

池内遺跡2

松原市天美東4丁目地内における店舗建設工事に伴う池内遺跡C2-4-7発掘調査報告書

令和2年（2020）3月

松原市教育委員会



調査区全景（a区 南東上空から）



調査区全景（b区 北上空から）

例　　言

1. 本書は、令和元年度に実施した、大阪府松原市天美東4丁目297番1外8筆における池内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査依頼者は、株式会社関西ケーズデンキで、当該地における店舗建設工事に伴い発掘調査を実施した。
3. 発掘調査及び整理作業にかかる費用は、株式会社関西ケーズデンキが負担した。
4. 現地調査は、令和元年(2019)6月24日から開始し、同年10月30日まで行った。引き続き、令和2年(2020)3月31日まで、整理作業を行った。
5. 調査面積は、4800m²である。
6. 松原市教育委員会における調査地区番号の呼称は、C2-4-7である。
7. 現地調査・整理作業は、松原市教育委員会 横木規秀が担当し、岡本武司(株式会社島田組)が補佐した。
8. 本書の作成は、1 調査の経緯と経過の執筆を横木が、それ以外の執筆・編集を岡本が担当した。
9. 本書で用いた平面座標値は、すべて世界測地系2011平面直角座標系第VI系に則する。また水準値は、東京湾平均海面高(T.P.)を基準とし、いずれもm単位で表記した。また標高に冠する“T.P.+”号は本書では省略している。
10. 土層の土色及び土壤粒状区分の判定、土器の色調判定については、小山正忠・竹原秀雄編 2014『新版標準土色帖』36版 農林水産省農林水産技術会議事務所・財團法人日本色彩研究所監修、日本色研事業株式会社発行を用いて行った。
11. 遺物実測図について、土器の断面を、須恵器は、黒色、黒色土器・瓦器は、灰色で塗り表現した。
12. 今回の発掘調査に関わる出土遺物、写真、図面等の記録媒体は、すべて松原市教育委員会が保管している。
13. 参考文献
 - 1 財團法人大阪府文化財センター 2010『池内遺跡』財團法人大阪府文化財センター調査報告書第198集
 - 2 公益財團法人大阪府文化財センター 2012『池内遺跡2』公益財團法人大阪府文化財センター調査報告書第227集
 - 3 公益財團法人大阪府文化財センター 2017『池内遺跡』松原市文化財報告第1冊・公益財團法人大阪府文化財センター調査報告第282集 松原市教育委員会
 - 4 公益財團法人大阪府文化財センター 2019『池内遺跡』松原市文化財報告第2冊・公益財團法人大阪府文化財センター調査報告第297集 松原市教育委員会
 - 5 古代の土器研究会 1992『古代の土器1 都城の土器集成』
 - 6 古代の土器研究会 1993『古代の土器2 都城の土器集成II』
 - 7 古代の土器研究会 1994『古代の土器3 都城の土器集成III』
 - 8 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本法律の土器様式の成立と展開、7世紀～19世纪－』京都編集工房
 - 9 広瀬和雄 1986『変化と画期 中世への胎動』『岩波講座 日本考古学6』岩波書店
 - 10 松原市教育委員会 2018『松原市文化財分布図2017』
 - 11 尾上実 1983『南河内の瓦器碗』『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』古代を考える会藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

目 次

1 調査の経緯と経過	
(1) 調査の経緯
(2) 調査の経過
(3) 調査の方法	
現地調査
整理作業
2 位置と環境	
地理的環境
歴史的環境と既往の調査
3 基本層序	
層序
包含層出土遺物
4 検出構造と出土遺物	
(1) 掘立柱建物
(2) 溝
(3) 井戸
(4) 土坑
(5) 小溝群
5 結語	
掘立柱建物について
総括

挿図

- 第1図 発掘調査範囲図 1:6000 池内道路位置図 1:50000
第2図 調査区土層図 1:20 埋没河川状況図 1:2000
第3図 包含層 出土遺物図 1:4
第4図 調査区全体図（a区） 1:300
第5図 調査区全体図（b区） 1:300
第6図 掘立柱建物1A 平・断面図 1:50
第7図 掘立柱建物1B 平・断面図 1:50
第8図 掘立柱建物2A 平・断面図 1:60
第9図 掘立柱建物2B 平・断面図 1:50
第10図 掘立柱建物3 平・断面図 1:50
第11図 掘立柱建物4A 平・断面図 1:50
第12図 掘立柱建物4B 平・断面図 1:40
第13図 掘立柱建物5 平・断面図 1:60
第14図 掘立柱建物6・7・8・9 平面図 1:100
第15図 掘立柱建物6・7・8・9 断面図 1:40
第15図附 掘立柱建物6・7・8・9 断面図上層（挿図掲載順）
第16図 掘立柱建物10 平・断面図 1:50
第17図 a区中央柱穴群 平面図 1:80
第18図 掘立柱建物 出土遺物図 1:4

- 第19図 a区中央柱穴群 出土遺物図 1:4
 第20図 26・223・432・533溝 断面図 1:40
 第21図 223溝 出土遺物図（土師器・黒色土器）1:4
 第22図 223溝（須恵器・製塙土器）・533溝 出土遺物図 1:4
 第23図 326・433井戸 平・断面図 1:40 出土遺物図 1:4
 第24図 254・255・267土坑 平・断面図 1:40 254・255土坑 出土遺物図 1:4
 第25図 404土坑 通出土状況 平・断面図 1:20 土遣物図 1:4
 第26図 436・437・439土坑・438溝 平・断面図 1:40 439土坑 出土遺物図 1:4
 第27図 434・534土坑 断面図 1:40 534土坑 出土遺物図 1:40
 第28図 434土坑 出土遺物図 1:4
 第29図 小溝群 出土遺物図 1:4
 第30図 小溝群分類模式図 1:1000
 第31図 挖立柱建物群分類模式図 1:1000

表

- 表1 a区中央柱穴群一覧表(1)
 表2 a区中央柱穴群一覧表(2)
 表3 a区中央柱穴群一覧表(3)
 表4 a区中央柱穴群一覧表(4)

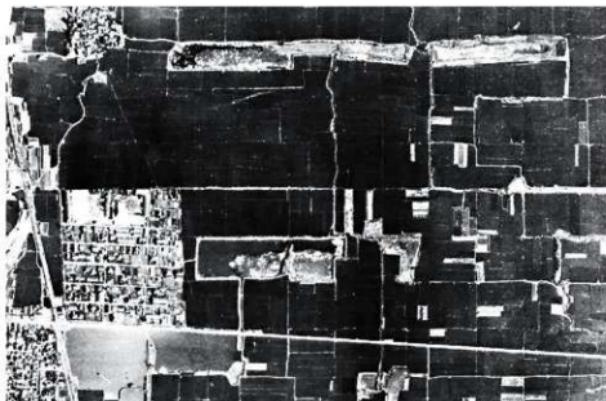
- 表5 本文掲載以外の道構一覧表(1)
 表6 本文掲載以外の道構一覧表(2)
 表7 本文掲載以外の道構一覧表(3)
 表8 本文掲載以外の道構一覧表(4)

図版

- 図版1 溝査区全貌オルソ写真(a-b区合成)
 図版2 挖立柱建物1A・1B
 図版3 挖立柱建物2A・2B
 図版4 挖立柱建物3
 図版5 挖立柱建物4A・4B
 図版6 挖立柱建物5
 図版7 挖立柱建物6
 図版8 挖立柱建物7
 図版9 挖立柱建物8
 図版10 挖立柱建物9
 図版11 挖立柱建物10
 図版12 26・223・432溝
 図版13 533溝・326・433井戸・254土坑
 図版14 255・267・404・434・439土坑
 図版15 439・534土坑・小溝群・包含層土器
 図版16 包含層・挖立柱建物 出土遺物
 図版17 挖立柱建物・a区中央柱穴群出土・223溝 出土遺物
 図版18 223溝出土 出土遺物
 図版19 223溝出土 出土遺物
 図版20 223・533溝 出土遺物
 図版21 326・433井戸・254・255・434・439土坑 出土遺物
 図版22 404・434・534土坑・小溝群 出土遺物



松原市立天美北小学校5・6年生現場見学会



◀ 昭和 22 年 (1947)
(国土地理院 USA-M85-1-191 より編集)



◀ 昭和 60 年 (1985)
(国土地理院
C0852-2-18-18
CK8852-C1-13 より編集)



◀ 平成 29 年 (2017)
(国土地理院
C0820174-C11-16
CK8820174-C12-10 より編集)

調査地周辺の変遷

1 調査の経緯と経過

(1) 調査の経緯

本書は、大阪府松原市天美東4丁目297番1外8筆における株式会社関西ケーズデンキによる店舗建設工事に伴う発掘調査報告書である。

松原市教育委員会は、平成31年(2019)4月10日付けて、事業者である株式会社関西ケーズデンキ代表取締役杉本正彦より発掘届の提出を受け、事業者・施工責任者である大和ハウス工業株式会社堺支店・代理人である株式会社島田組と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、周辺の発掘調査成果から、工事予定地にも埋蔵文化財が所在すると認められたため、本発掘調査を実施することになった。本発掘調査範囲は地盤改良等の工事内容を精査し、4,800m²に決定した。

以上の協議をふまえ、松原市教育委員会と事業者との間で、令和元年(2019)6月18日付けて埋蔵文化財保存に関する協定を締結し、令和元年(2019)6月24日付けて発掘調査の実施に関する覚書を取り交わし、本発掘調査に着手した。

(2) 調査の経過

調査は、掘削土の仮置きに伴い北半部をa区、南半部をb区に分割して進めた。令和元年(2019)6月24日よりa区の調査を開始し、重機掘削・遺構検出・遺構掘削・写真撮影・図面作成作業を行い、8月26日に終了した。引き続きb区の調査を開始し、同様の作業を行った後、令和元年(2019)10月30日に機材の撤収作業を完了して、現地調査を終了した。

なお、令和元年(2019)10月9日に市立天美北小学校の5・6年生約110名が現場見学に訪れ、発掘調査の様子や成果にふれた。この後、整理調査を行い、令和2年(2020)3月31日付けて本報告書の刊行をもって全ての作業を終了した。

(3) 調査の方法

【現地調査】

【調査番号】 松原市では、調査番号を表記する際、昭和56年度(1981)より「松原市道路台帳地図」の図面割を使用している。この図面割は、国土交通省(旧建設省)国土地理院の定める日本測地系による平面直角座標系

第VI系に準拠しており、X=-155.4km、Y=-44.0km～X=-160.8km、Y=-37.6kmの範囲を、東西800m、南北600mの大地区で、東西に8区(A～H)、南北に9区(1～9)に分けるものである。さらに、それらの各区画は、東西400m、南北300mの4つの小地区(1～4)から構成されている。これに基づき、調査名は大地区-小地区-調査番号(調査次数の番号)と表記しており、本調査名はC2-4-7である。

【座標・水準】 本書で用いた座標値は世界測地系による平面直角座標系第VI系の数値で、m単位で表記した。水準は全て東京湾平均海面(T.P.)を基準とした。なお、方位は座標北を使用した。

【遺構番号】 遺構番号は、遺構を示すSの後に、遺構の種別を問わず遺構の検出順に番号を付した(例S001)。掘立柱建物など複数の遺構がまとまるものについては、整理調査時に“掘立柱建物1”的ように、遺構の名称の後ろに番号を付した。なお、本書では冒頭のSを省略し末尾に遺構の種類を記述した(例223溝)。

【図面・写真】 図面については、デジタル写真撮影を行なったものをAgisoft社製Metashape1.61を用いて写真測量解析作業を行い、オルソ写真を出し、1:100の遺構略平面図、1:10の個別遺構断面図、1:20の調査区敷面上層図、1:10の遺物出土状況図等を作成した。a b調査区の完掘作業終了時には、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量作業を行い、1:20の遺構平面図を作成した。写真撮影は、Canon社製フルサイズのデジタルミラーレス一眼カメラを使用して、RAWモードで撮影、その後TIFFフォーマットとJPEGフォーマットに変換し、それぞれのフォーマットで保存した。

【整理作業】

【遺構】 遺構図の合成及び報告書に掲載する遺構写真の編集は、Adobe社製Photoshop CS5.5を用いて行った。遺構図のトレースはAdobe社製Illustrator CS6を用いてデジタルトレースを行った。

【出土遺物】 出土遺物は洗浄作業の後、注記作業を行った。注記は一覧表を作成し、出土単位ごとに遺物番号をつけ、調査番号・遺物番号・出土年月日を明記した(例C2-4-7-001 20190910)。注記後は、主要なものを抽出して、接合・復元作業を行い、実測図を作成した。実測図のトレースはIllustratorCS6を用いてデジタルトレースを行った。報告書に掲載するものについては写真を撮影し、PhotoshopCS5.5を用いて編集した。

2 位 置 と 環 境

【地理的環境】

池内遺跡は、大阪府松原市の北西部に位置する遺跡である。松原市は、河内平野の南端部に位置し、山地、丘陵はない。市域東方は南から伸びる羽曳野丘陵先端の舌状台地であり、市域西方は和泉地方から北伸し上町台地へと続く泉州北丘陵の先端の台地状地形である。これら東西両台地上地形の間は主として沖積地帯であり、大阪狭山市に所在する狹山池付近を中心に扇状に広がる平坦地形となっている。この扇状地形の東縁には東除川、西縁には西除川が北流していて、市域北辺を西流する大和川に至っている。

なお、この大和川は、宝永元年(1704)に柏原市から北西に流れているのが付け替えられた人工河川で、それ以前は東除川、西除川とも上町台地東縁に沿って大阪市平野区方面へ北流していた。池内遺跡はこの沖積平地の中にあって、微細な高低差はあるものの概ね平坦地形で、標高は、9.5 m前後である。

【歴史的環境と既往の調査】(第1図)

松原市においては、旧石器時代の遺構は確認されておらず、台地上においてわずかにナイフ形石器等の出土を見るのみである。縄文時代に至っても、明確な遺構は未だ確認されていない。しかしながら近年、本遺跡の東側の遺跡である三宅西遺跡において、埋没河川からではあるが、良好な遺存状態を保つ縄文時代後期中葉の土器群の出土を見た。遺構こそは確認されなかったが、集落が存在していたことは間違いないであろう。

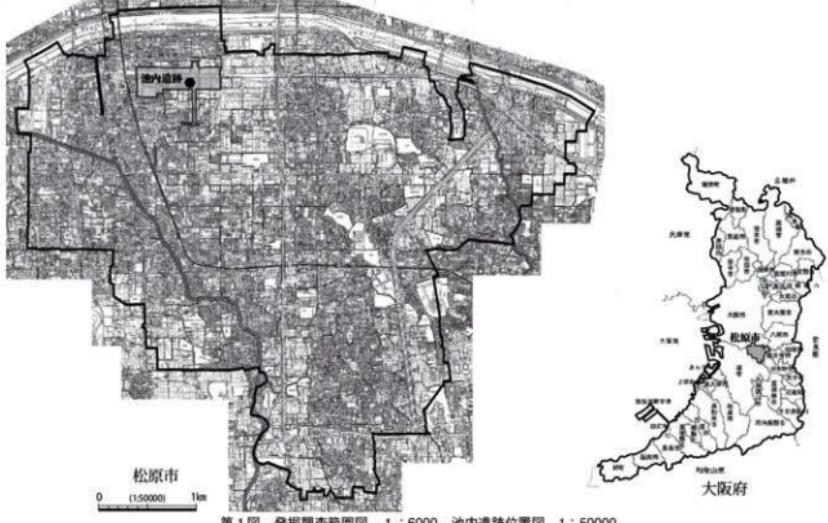
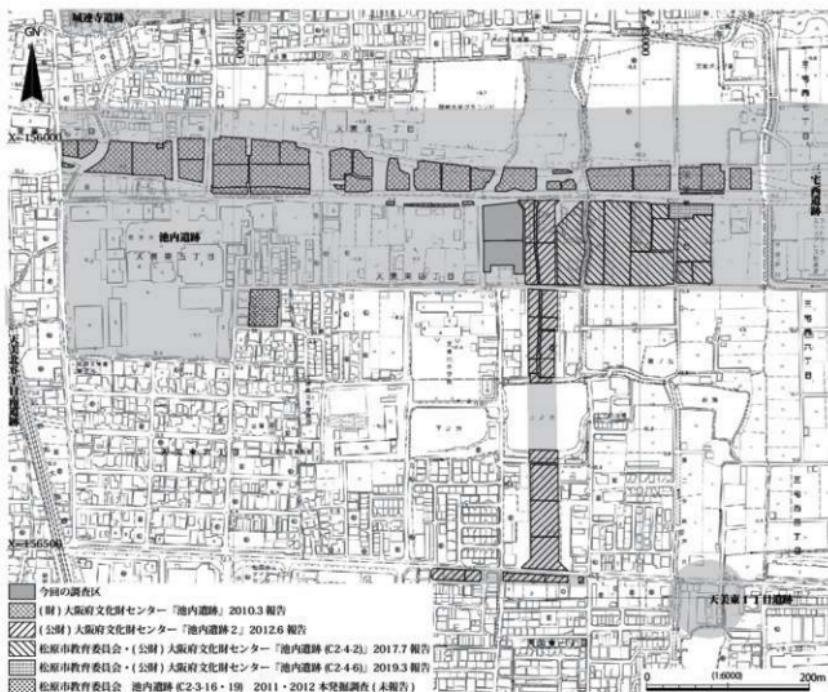
弥生時代においては、本遺跡において、近年、前期中葉の水田跡と大溝、集落跡などが確認され注目される。これらは環濠集落である可能性もある。中期においては、市内西方の高木遺跡、あるいは東方の若林遺跡において、集落遺構が認められる。弥生時代後期以降は遺跡数は増加傾向にある。後期から古墳時代初頭では、上田町遺跡が著名である。昭和39年(1964)に行われた発掘調査で出土した上田町式土器と称された土器群は、現在、庄内式土器、布留式土器といった古式土器研究の先鞭となるものであった。また弥生時代後期の大規模な水田跡も確認され、この当時からいわゆる沖積段丘上の開発が始まつた様相が窺われる。

古墳時代に至っては、本遺跡西方の大和川今池遺跡において、掘立柱建物等が確認されており、広く集落形成が進んでいた様子である。また上田町遺跡においても弥

生時代後期水田よりも東方で水田跡が確認されており、段丘開発がさらに進展していたことが窺われる。松原市域において古墳は、現在、河内大塚山古墳(宮内庁陵墓参考地)が見られるのみである(東半部は羽曳野市域)。古市古墳群と百舌鳥古墳群の中間に位置する市域には、両古墳群にみられるような大古墳は、この河内大塚山古墳のみである。しかしながら発掘調査において、後世の開発により削平された小規模な古墳の存在が知られる。立部遺跡では、一辺または直径4~12 m程度の7基の小規模古墳群が確認された。そのほかにも市内随所で古墳の痕跡、埴輪の出土が認められ、市域において在地勢力の定着が一層進んでいたことが推察されるものである。

飛鳥時代から奈良時代にかけては、市内の開発は国家的規模で進められることになる。大津道、丹比道といった官道の設置である。大和川今池遺跡では、難波大道と称される南北直線道路遺構が確認された。これは日本書紀にみられる難波宮から発する直線大道に相当するものとされる。また一方、河合遺跡では大規模な官衙を彷彿させる掘立柱建物群も確認され、丹比郡衙の所在に一石を投じることになった。池内遺跡の位置する市域北部域は、条里制という方形水田区画が良好に遺存する地域である。この条里制の施行起源は、從来、奈良時代に始まるときれてきた。よって本遺跡周辺地域も永らく歴史的に見ても水田地帯であるという様に理解されてきたが、近年の本遺跡周辺の調査においては、平安時代中期から後期の掘立柱建物群が広く分布する状況が確認され、生産域だけではなかったことが知られるようになった。遺構の中には9世紀後半から10世紀代のもので大規模な屋敷地ともいえる建物群もあった。寺社領莊園の拡大や在地勢力の勃興などを背景に、丹比郡における集落構成や生産地域との関係を新たに究明する資料となったものである。

平安時代末期から鎌倉・室町時代においては、本市域、殊に南部の丹南地域は、河内鈔物師の拠点であった。発掘調査においても、丹南遺跡、立部遺跡、岡遺跡などで鈔物師工房と推察される遺構群が確認されており、盛んに鑄造が行われていたことがわかっている。また南北朝の対立、室町時代畠山氏の争乱等に伴い小規模な城砦も市内に構築されたことが知られるが、発掘調査では未だ明らかとはなっていない。



第1図 発掘調査範囲図 1:6000 池内遺跡位置図 1:50000

3 基本層序

【層序】(第2図)

調査地の現況は、南西部が一部駐車場として利用されていたほか、調査前に南端部を除く部分が、工事用資材置き場として利用されていた経緯があるものの基本的には農耕地である。駐車場利用箇所も駐車場として利用される以前は農耕地であった。現地表面の標高は、南西部で10.2m、北西部で9.3m、北東部で9.6m、南東部で9.1mで、南西部が他所よりも高い値であるのは、駐車場造設のための盛土施工がなされていたためである。また北東部にも整地のための盛土層があり、若干高い数値となっている。

調査地における堆積土層は、0層から4層に大別分層することができる。層序は、上から0層：盛土層、1層：耕土層、2層：床土層、3層・4層：包含層となっている。1層：耕土層は、現代の耕作土層で、市域における近年の都市開発以前の現地表面である。その上面の標高は、南西部で9.5m、北西部で9.3m、北東部で9.4m、南東部で9.1mで、南東部が若干低い。2層は1層：耕土層に伴う床土層である。床土層は農耕地を形成する土層の一部で、耕土の保水、排水にかかわる下地的な役割を果たす土層である。通常は2~5cm程度の層厚であるが、必ずしも存在するわけでもなく、また発掘調査の過程においては、現代耕土よりも一時期遡る旧耕土層の残滓を2層とする場合もある。いずれにせよ現代の土層またはそれに近い土層である。3層は包含層ではあるが、調査地においては、歴史的に過去の耕作土層を積み上げた耕作土の累積土層で、人為的堆積土層である。本層は、耕土層の累積であるがゆえに水平に堆積する幾層かの土層に細分することが可能である。本来であればそれらの各細分土層は時代性を持った土層であるとも言えるが、それらを判別することはきわめて困難であるので、今回の調査では、大別して3層としておく。3層の上面標高は、南西部で9.3m、北西部で9.1m、北東部で9.1m、南東部で8.8mで、やはり南東部が低い。4層も包含層とするが、本調査においては、遺物の出土は確認できなかつた。しかしながら近隣の発掘調査においては、当該4層以下においても遺構や遺物を検出したところもあるためにここでは包含層という認識にしておく。今回の調査地では、4層を構成する土層は、砂層堆積層、またはシルト層、あるいは粘質土層でもあって一定しない。これらは、水成層または土壤化層であって、3層とは異なり自然堆積層である。なお4層の上面は、今回の調査に

おける遺構検出面でもある。4層上面の標高は南西部で9.2m、北西部で8.9m、北東部で8.9m、南東部で8.8mである。3層以上の層では、南東部が低い印象であったが、4層上面標高では、若干低い程度である。3層以上の層の高低差は、3層を含む耕作土層の累積程度の差であることがわかる。また本層南西部の標高が30~40cm程度高いのは、本層が自然成因の土層であることから自然地形であると思われる。調査地においては、本来は南西から北西に傾斜する地形であったことが推察される。

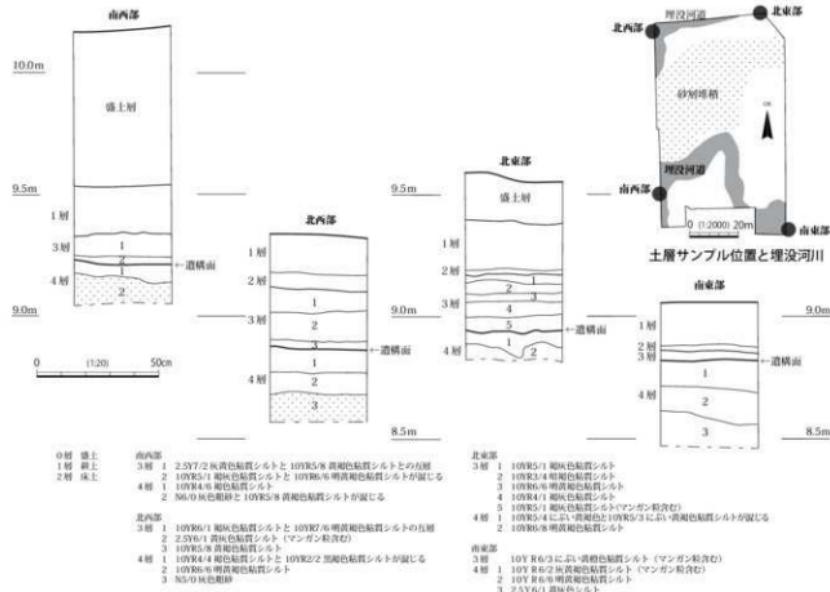
4層の構成土層に砂層堆積層も認められることを先述したが、おおよそ埋没河川の存在を想定できるものである。砂層堆積層は、層厚50cm程度で安定土壤化層を認めるところと2m近くの層厚を認めるところがあり、氾濫堆積部と埋没河川河道部とが調査地内で混在していると思われる。現地調査において砂層堆積層のおおよその分布範囲や道構等の掘削過程で確認された砂層の層厚、空中写真からの解析等により、概ね第2図の右上図に示すような旧河道が復元できるものと思われる。しかしながら下層調査については、部分的な調査を行ったのみで、また出土遺物も確認できなかつたため、想定される埋没河川の時期や河道の重複などは、今後さらに検討する必要があろう。

【包含層出土遺物】(第3図、図版16)

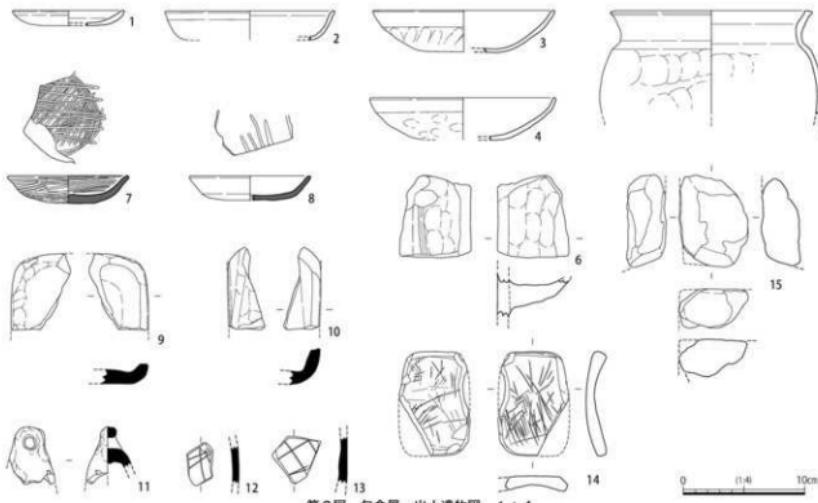
包含層出土遺物については、第3図1~15に主なもの、特筆すべきものを図示掲載した。15を除きすべて3層からの出土である。15は近世以降の用水路から出土したものであるが、今回は包含層出土遺物にまとめることにした。出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶磁器、製塩土器、瓦、埴輪、石製品である。1~6は土師器で、1は小皿、平安時代末期~鎌倉時代、2は皿、3、4は椀、5は甕、6は甕で、平安時代前期(9世紀代)のものと思われる。7、8は瓦器で、いずれも小皿である。7は、内外面にヘラミガキと暗文を施し、12世紀頃のものと思われる。9~13は須恵器で、9、10は風字硯、11は釣鐘型鏡壺である。風字硯2点は平安時代前期(9世紀代)のものと思われる。11は、古墳時代のものである。12、13は鉢の体部と思われる須恵器小片であるが、内面に格子状の線刻が認められる。焼成以前にヘラ状のもので線刻されたもので、線刻の意図するところは不明である。14、15は石製品である。14は滑石製温石で紐

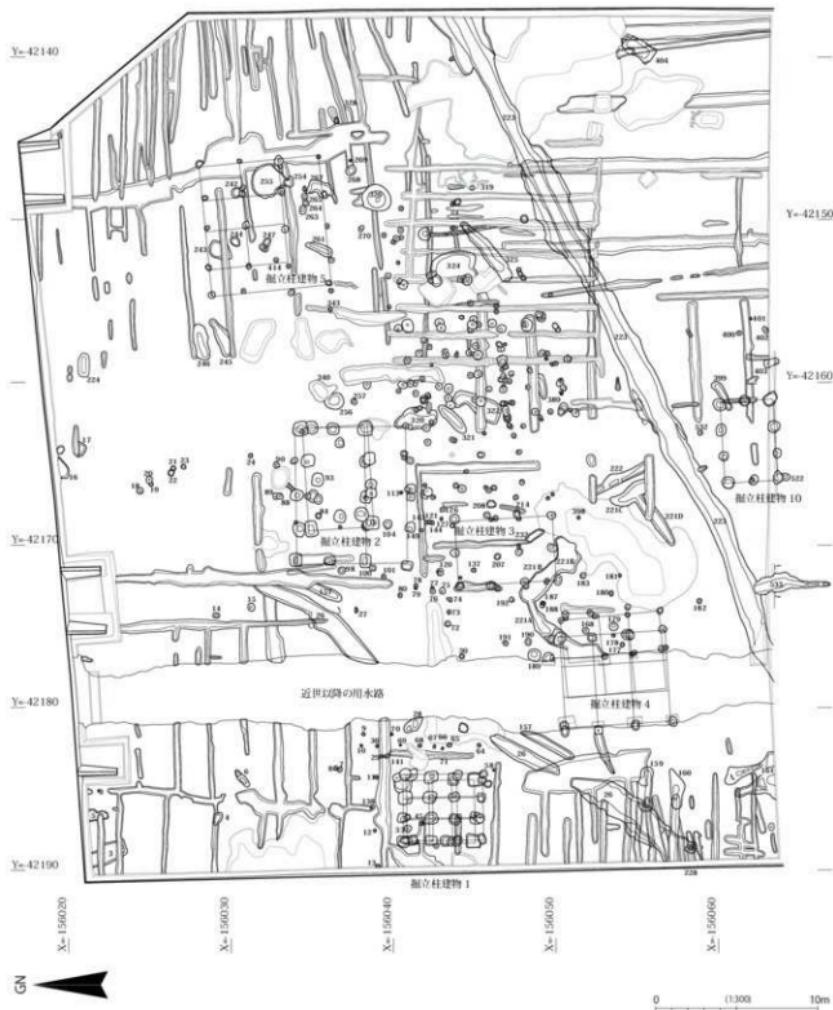
孔はない。湾曲した形状から石鍋片を転用したものである可能性が考えられる。内外面とも擦過痕が認められ、内外面の四面角はすべて面取り加工が施されている。15

は凝灰岩切石片で、三面の平坦面を認める。また平坦面には焼痕が認められる。

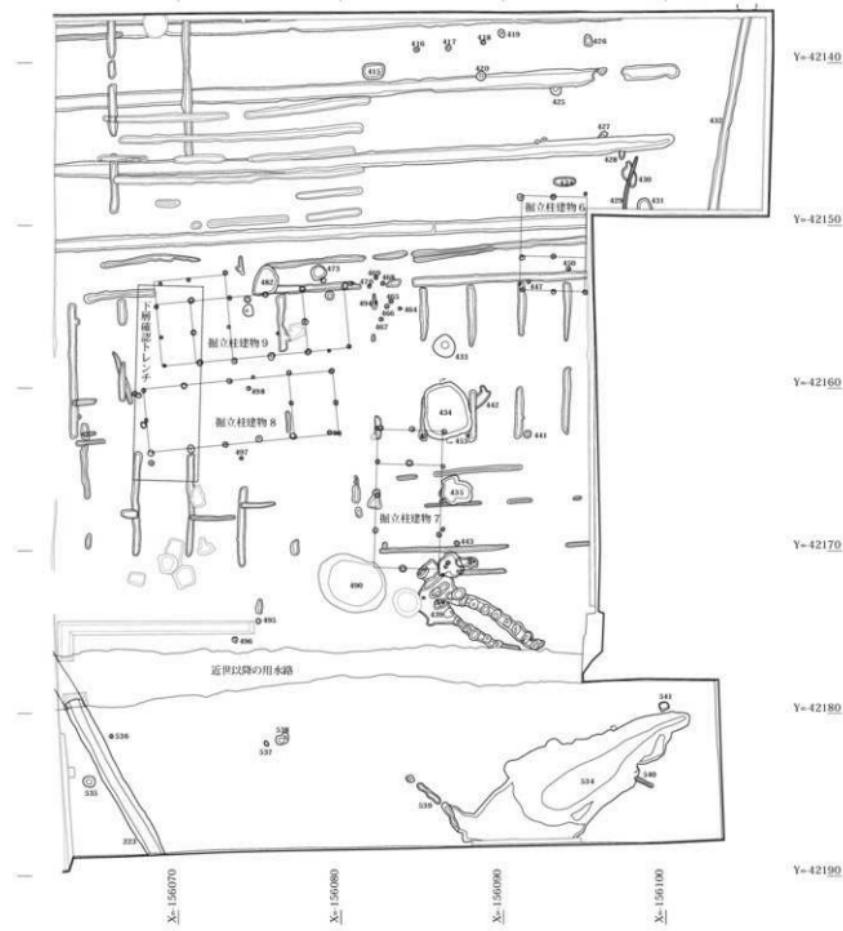


第2図 調査区土層図 1:20 埋没河川状況図 1:2000

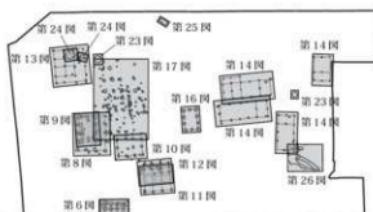




第4図 調査区全体図（a区） 1:300



先に記述したように遺傳子型の記載がないものについては、右記日付より各欄を参照。



第5図 調査区全体図（b区） 1:300

4 検出遺構と出土遺物

(1) 掘立柱建物

今回の発掘調査では、柱穴を 454 基検出した。そのうち各柱穴の配列状況から掘立柱建物を 10 棟を復元することができた。

【掘立柱建物 1 A・1 B】(第 6・7・18 図、図版 2・17)

a 区中央西端で検出した掘立柱建物である。二棟の建物が重複しており、それぞれ掘立柱建物 1 A、掘立柱建物 1 B とする（以後 1 A・1 B と省略）。1 A・1 B とも南北棟で、1 A の棟方向は、座標北に対し 1° 0' 西に、1 B は 0° 59' 西に振っていて、二棟は、ほぼ同一方向である。柱間は、1 A・1 B とも桁行 3 間、梁行 3 間で、1 A は、桁行 44 m、梁行 39 m、1 B も桁行 44 m、梁行 39 m である。2 棟は、方向性、規模からまったく同一規模の建物といえ、その重複状況から、1 A 建築後に 1 B に建替建築を行ったものと推察できる。1 B を見る限り建物内部にも柱穴があり総柱建築であったと考えられる。1 A の方には、内部柱穴は確認できなかったが、1 B に重複して損壊したかあるいは 1 B 建築時に流用されたものと思われ、1 A も同様に総柱建築であったと思われる。そのほかにも 1 A では、1 B 柱穴のために本来あるべきところに確認できない柱穴もあって、同様に重複損壊か流用されたものと思われる。柱穴は、概ね隅丸方形を呈し、1 A では最大のもので 100 × 70cm を測るほか、一辺 60 ~ 70cm 程度の柱穴を配する。深さは、最大で 80cm を測るものがあるが、概ね 50cm 程度である。1 B の柱穴は、形態的には隅丸方形とするが、若干崩れた傾向にある。規模は一辺 60 ~ 70cm で、深さは最大 70cm であるが、概して 50cm 程度である。なお 1 B を構成する 31 柱穴では、状態は良くないものの木柱根が遺存していた。柱材の基部で、その直径は約 25cm を測る。また 32 柱穴では扁平な泥岩を礎板として使用している状況が確認された。当該建物の立地箇所は湧水が著しく、おそらく建築の際には苦心したことと推測する。礎板は少しでも立柱を安定させる努力であろう。また建物を構成する柱穴以外にも重複する柱穴がいくつかあり、頻繁に補修や補強が行われたものと考えられる。

1 A を構成する柱穴からの出土遺物には、土師器椀・皿・壺、黒色土器 A 類椀があるが、少量で小片のみであった。唯一、第 18 図 16 に土師器椀を示す。口縁部が屈曲して内傾して立ち上がる形状が特徴的で、小型の

鉢とでもいえそうな器形である。1 B からの出土遺物には、土師器椀・皿・壺、須恵器、黒色土器 A 類椀、製塩土器が認められるが、小片ばかり少量である。図示できたものは、第 18 図 17 に示す土師器椀のみである。体部外面にヘラケズギが認められる。1 A・1 B の出土遺物はいずれも小片で、時期検討の要素を欠くが、概ね 9 世紀代のものとしておきたい。なお 1 A・1 B は、その規模や柱構造から倉庫建築であったと考えられる。

【掘立柱建物 2 A・2 B】(第 8・9・18 図、図版 3・16・17)

a 区中央付近で検出した掘立柱建物である。二棟が重複しており、古い方から掘立柱建物 2 A、掘立柱建物 2 B とする（以後 2 A・2 B と省略）。2 A は東西棟で、梁方向は、座標北に対して 1° 3' 西に振っている。柱間は、東西 4 間、南北 3 間であるが、南辺柱列は柱穴規模が若干他と比べて小振りになることや南北の柱間が若干伸びることから庇柱と捉え、本建物は、主屋桁行 4 間、梁行 2 間で、南辺に庇付きの建物と考える。よって主屋規模は桁行 8.4 m、梁行 4.3 m である。柱穴は、やや崩れた隅丸方形を呈し、概ね一辺約 60 ~ 80cm で、深さは概して 30 ~ 40cm である。庇柱は直径 40cm の円形状または一辺 60cm 程度の隅丸方形で、深さは、20cm 程度と主屋よりも浅い。

2 B も同じく東西棟で、梁方向は座標北に対し 3° 50' 西に振っており、2 A とは若干方向を違える。柱間は、桁行 3 間、梁行 2 間で、規模は、桁行 6.3 m、梁行 4.0 m である。柱穴は、崩れた隅丸方形か円形状に近いもので、一辺 100cm または直径 70 ~ 80cm を測る。ただし西辺中央の 96 柱穴は直径 20cm、深さ 5cm 程度しかなく異様に小さい。またそのすぐ横に 95 柱穴、対する東側に 94 柱穴が存在する。これらが棟持柱である可能性があるが、特殊な構造として検討が必要である。2 A では東辺の柱穴の検出を欠くが、2 B 柱穴の 145 柱穴、147 柱穴、148 柱穴と重複するためと思われる。2 B 建築時に損壊したかあるいは 2 B 建築時に再利用したものと思われる。2 A と 2 B は、建物方向も若干異なり、規模、構造も異なるが、2 B 建築時に 2 A 建物を意識したものとなっていて、互いの建築時期は建替に近い程度の時期差ではないかと推察される。

2 A の柱穴からの出土遺物には、土師器椀・皿・壺、須恵器、黒色土器 A 類・B 類椀、製塩土器、平瓦が認められるが、いずれも小片である。第 18 図 22 に須恵器

杯を示す。2Bからは土師器椀・皿・壺・高杯、黒色土器の出土があった。小片ばかりであったが、第18図18～21に示す。18、20、21が土師器皿、19が土師器椀である。2A・2Bとも出土遺物は9世紀代のものと考える。

【掘立柱建物3】(第10・18図、図版4・17)

a区中央、掘立柱建物2の南方で検出されたものである。南北棟で、棟方向は、座標北に対し、3°36'西に振る。柱間は桁行3間、梁行2間で、桁行6.0m、梁行4.0mを測る。柱穴は、円形状または楕円形状を呈し、径30～50cmである。北東隅の129柱穴のみ直径60cmと大きい。深さは、概ね30cm程度である。また建物内部に205柱穴が見られる。196柱穴と200柱穴の中間にあって、東柱と考える。構成する柱穴からは、土師器椀・皿・壺・高杯、須恵器杯・壺、黒色土器A類椀、平瓦が出土しているが、いずれも小片である。第18図23に須恵器杯のみ図示できた。9世紀代の所産と考えておきたい。

【掘立柱建物4A・4B】(第11・12図、図版5・17)

a区で掘立柱建物3の南西側で検出されたものである。二棟の建物が重複しており、古いものから掘立柱建物4A、掘立柱建物4Bとする(以後4A・4Bと省略)。4Aは、南北棟で、棟方向は、座標北に対して3°37'西に振っている。建物の中央を南北に近世以降の用水路が走っているため、建物西辺と東辺しか残っていない。規模は、桁行6.5m、梁行5.6mである。柱間は、桁行3間であるが、梁行は、損壊しててわからない。しかししながら規模からすると3間であると推定できる。柱穴は崩れた隅丸形状もしくは楕円形状を呈し、一辺もしくは直径50～70cmを測る。深さは10～50cmを測るが、概ね30cm程度である。北東隅の229柱穴では、基底部に須恵器壺の部品片を敷きならべた状態が確認できた。当該遺物は、図版17(158・159)に写真で示す。4A・4Bの立地も湧水が著しいところであり、土器片を礎板に転用して沈下を防いだものと思われる。4Aは、建物規模から考えて内部にも柱を設ける総柱建築であった可能性を考えられ、倉庫建築であった可能性が高い。

4Bは、南北棟の建物で、棟方向は座標北に対して5°53'西に振っている。西辺を近世以降の用水路により損壊している。柱間は、桁行3間を確認できるが、梁行は、損壊のため不明であるが、2間と推測する。建物規模は、桁行6.1m、梁行推定48mである。柱穴は円形状もしくは不整円形状を呈し、直径30～40cmである。深さは20cm程度で浅い。

遺物は、4Aからは、土師器皿・壺・須恵器、黒色土

器A類が出土し、4Bからは、土師器小片がわずかに出士しているのみで、図示できるものはなかった。

【掘立柱建物5】(第13・18図、図版6・16・17)

a区北東部で検出したものである。東西棟で、梁方向は、座標北に対し5°53'西に振っている。柱間は桁行4間、梁行3間を認めるが、西辺および南辺は、柱穴規模や柱間距離、配列状況から庇柱と思われる。よって主屋は桁行3間、梁行2間で、南・西辺に庇付きの建物であると考える。また主屋建物内部にも柱穴が認められ、東柱と考える。建物規模は、主屋桁行6.5m、梁行4.8mを測り、庇を含めると桁行7.9m、梁行7.4mとなる。柱穴は円形状もしくは楕円形状を呈し、小さいもので直径20cm、大きいもので直径50cmを測る。また深さは10～20cm程度で、柱穴規模としては小振りである。

建物を構成する柱穴からは、土師器小皿・皿・羽釜・壺、須恵器杯・壺、瓦器椀・皿・鉢が出土した。いずれも小片ではあるが、第18図25～30に図示した。25、26は土師器小皿、27、28は土師器皿、29は瓦器椀、30は土師器羽釜である。概ね平安時代末期～鎌倉時代初頭(12世紀代)のものと思われる。

【掘立柱建物6】(第14・15図、図版7)

b区南端で検出したものである。東西棟の建築であり、梁方向は、座標北に対して1°45'東に振っている。桁行5.8m、梁行4.1mの規模で、柱間は、南辺の柱穴の一部を調査用トレンチによって欠損してしまったが、桁行3間、梁行2間である。また建物内部には451柱穴を認め、東柱と思われる。柱穴はほぼ円形状で、直径20～30cm、深さ10～20cmと小規模な柱穴で構成される。建物を構成する柱穴からの出土遺物はなかった。

【掘立柱建物7】(第14・15・18図、図版8・17)

b区中央で検出されたものである。東西棟の建物で、梁方向は、座標北に対して1°26'東に振っている。柱間は、桁行4間、梁行2間で、建物内部の東側に463柱穴を認める。東柱と考える。柱穴は、ほぼ円形状を呈し、直径は20～30cmである。深さは概ね30cm程度である。ただし西辺中央の棟持柱にあたる455柱穴のみ他とは異なり丁寧に建柱されたようである。深さが、約60cmを測り、柱穴内部に、凝灰岩切石、木片、礎塊が埋設されていた。木片と礎塊は、柱芯の基底にあたり、礎板の用途と思われる。凝灰岩切石は、据方の基底部で、柱芯に沿うように設置してあり、建柱の際に柱材を安定させる目的であったと思われる。

なおこの凝灰岩切石については、第18図31に図示した。三面の平坦面を確認できるもので、本来は地覆石等の建築部材である。よって建物7のために調達されたものではなく、建物7の建築の際に、近隣で拾得した過去の建物の残骸を再利用したものであると推測する。このことで凝灰岩切石を用いるような建築が、当地近辺にかつて存在していた可能性が考えられるものである。建物7を構成する柱穴からは、ほかに土師器壺・甕、黒色土器A類、須恵器壺が出土しているが、図示できるものはなかった。

【掘立柱建物8】(第14・15・16図、図版9)

b区中央付近で検出したものである。南北棟で、棟方向は、座標北に対して西に $5^{\circ} 32'$ 振っている。柱間は、桁行5間、梁行2間で、規模は、桁行11.7m、梁行3.9mで、南北に長い形状である。建物内部南方の485柱穴と492柱穴の中間に484柱穴を認める。東柱と考えるが、485・484・492柱穴を建物主屋南側として、以南の柱列を庇とみる考えも捨てきれない。柱穴は、直径30~40cmの円形状で、建物規模に比べて小規模である。また深さも一応ではなく、浅いものは5cm程度、深いものは40cmで、柱穴を見る限り簡易的な建築物である印象を受ける。出土遺物は、わずかに土師器壺が出土しているが、小片で図示できるものはなかった。後述する掘立柱建物9とは規模、構造、建物の方向性などが近似し、二棟で対をなす建築物であった可能性が考えられる。

【掘立柱建物9】(第14・15図、図版10)

b区中央付近、掘立柱建物8の東側で検出したものである。南北棟で、棟方向は、座標北に対して $5^{\circ} 36'$ 西に振っている。規模は、桁行11.8m、梁行3.8mで、柱間は、一見、桁行5間、梁行2間であるが、511柱穴と515柱穴との間に518柱穴、建物内部の南方、476柱穴と474柱穴との間に475柱穴を認め、かつ南辺中央の柱穴を欠くので、511・515・474・476柱穴を四隅とする桁行3間、梁行2間の主屋建物で、北側と南側にそれぞれ庇が付く構造であったと考えたい。

なお510柱穴と516柱穴との間に517柱穴を認めるのは、東柱と考える。建物北部の東側に、南北に2間のみの小規模な柱穴列(521・519・520柱穴)が認められる。この部分にも庇があったとも考える。これら柱穴は、概ね円形状を呈し、直径20~40cmである。各柱穴の深さには一貫性がなく、浅いものは5cm程度、深いものは50cmを測る。出土遺物は、土師器壺・甕、黒色土器A類が認められるが、いずれも小片で、図示できるものはな

かった。

【掘立柱建物10】(第16・19図、図版11・17)

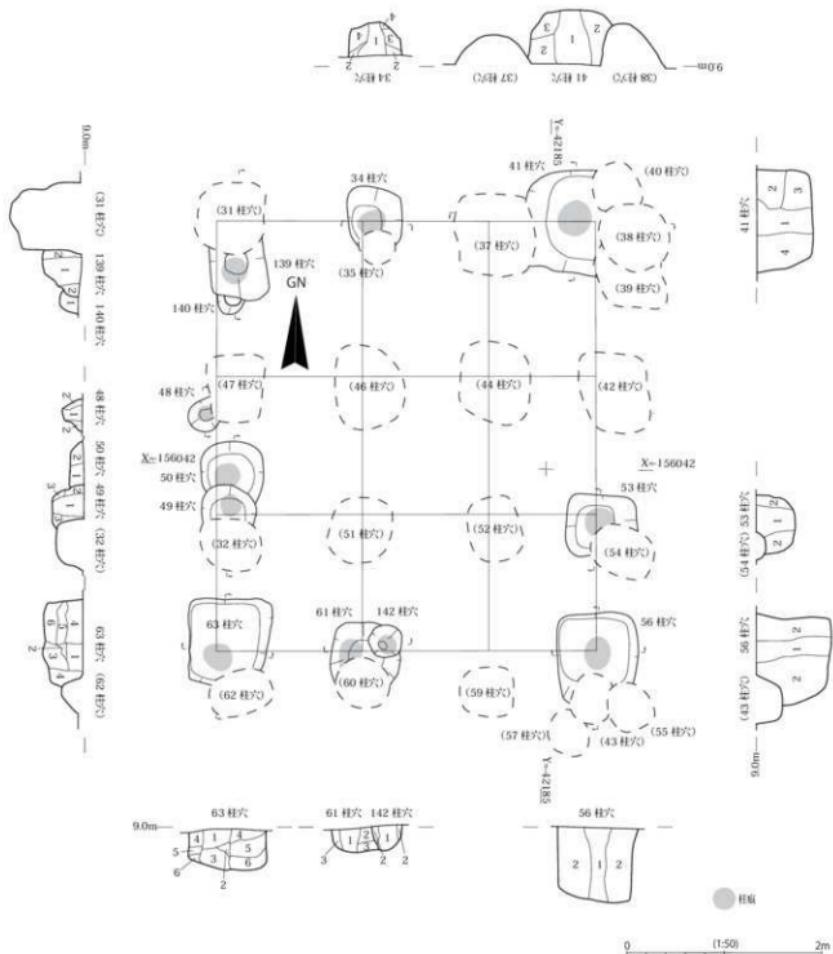
a区南端中央で検出されたものである。東西棟の建築で、棟方向は、座標北に対して $3^{\circ} 24'$ 西に振っている。建物規模は、桁行5.0m、梁行3.2mで、柱間は、桁行3間、梁行2間である。構成する柱穴は、いずれも円形状もしくは楕円形状を呈し、直径70~80cmと大型である。深さは30~50cmである。柱穴からの出土遺物は、土師器壺・甕・甕、須恵器壺、平瓦であるが、図示できたものは第19図24に示す土師器壺のみであった。

【a区中央柱穴群】(第17・19図、図版17)

掘立柱建物以外の大多数の柱穴は、主に各掘立柱建物1~10の周辺に分布しているが、殊に掘立柱建物2の南東で掘立柱建物3の東側にあたる域には、多数の柱穴が分布している。この域の柱穴群は、概観して見ると一定の配列傾向が読み取れそうではあるが、具体的に掘立柱建物を想定し、柱穴を認定するとなると躊躇せざるを得ない。よってこれらは柱穴群として報告する。

この域の柱穴群の分布範囲は、概ね南北6m、東西19mの範囲で、その中に150基程度の柱穴が分布している。柱穴形状はいずれも円形状で、規模は直径60cm程度のものと30cm程度のものの二種類を見てとれる。深さは、概ね大きい柱穴では30~50cm、小型の柱穴では10~30cmであるが、一定ではない。これら各柱穴は、互いの重複が著しい。この域の立地は、下層に湧水砂層があり、建築の条件としては良好とは言い難いところである。おそらく建築柱の建替や補強柱の増設といった補修を頻繁に行っていた結果と考える。この域での柱穴群から掘立柱建物復元の可能性を考えるのであれば、370柱穴から218柱穴までの東西方向の柱列、282柱穴から374柱穴までの南北方向の柱列が示唆的である。

出土遺物は、各柱穴から土師器壺・皿・高杯・甕・甕、須恵器・甕、黒色土器A類・B類壺、製塙土器、砥石が出土しているが、少量で小片ばかりである。そのうち図化できたものについて第19図32~43に示す。32~35は土師器壺、36、37は土師器甕、38は土師器高杯、39、40は黒色土器A類壺、41は土師器甕、42は製塙土器、43は砥石である。32、40が327柱穴、33、34が273柱穴、35が272柱穴、36が333柱穴、37が289柱穴、38が130柱穴、39が282柱穴、41が390柱穴、42が387柱穴、43が284柱穴からの出土である。時期決定の判断材料を欠くが、9世紀後半~10世紀代の範疇と思われる。



第6図 据立柱建物1A 平・断面図 1:50

卷之三

- 34 箱穴
1 10YR5/1 地灰色粘質シルトと 10YR5/6 深褐色粘質シルトが混じる
2 10YR5/1 地灰褐色粘質シルト
3 10YR5/6 深褐色粘質シルト

310R
410R

- 41 種六
1 10YR5/6 黄褐色粘質シルトと 10YR4/1 淡褐色粘質シルトが混じる
2 10YR5/6 黄褐色粘質シルトと 10YR5/1 淡褐色粘質シルトが混じる
3 10YR6/6 明黄褐色粘質シルトと 10YR4/6 淡褐色粘質シルトが混じる
48 種九

494-495

- 100R5/1 褐灰色點質シルト

- 2 -

- 3.2.5Y4/1 黄褐色點質シルト
50粒穴
1.1D/R4/2 黄褐色點質シルト

2109

- 53 柄穴
1 109R4/1 暗灰色粘質シルトと 109R5/8 淡褐色粘質シルトが混じる
2 109R4/1 暗灰色粘質シルトと 109R6/6 明淡褐色粘質シルトが混じる

卷之三

- 56種類
1 10YR4/3 に近い黄褐色粘質シルトと 10YR7/8 黄褐色粘質シルトが混じる
2 10YR4/1 初期黄褐色粘質シルトと 10YR6/8 明黄色粘質シルトが混じる
61種類

61 402
-110Y

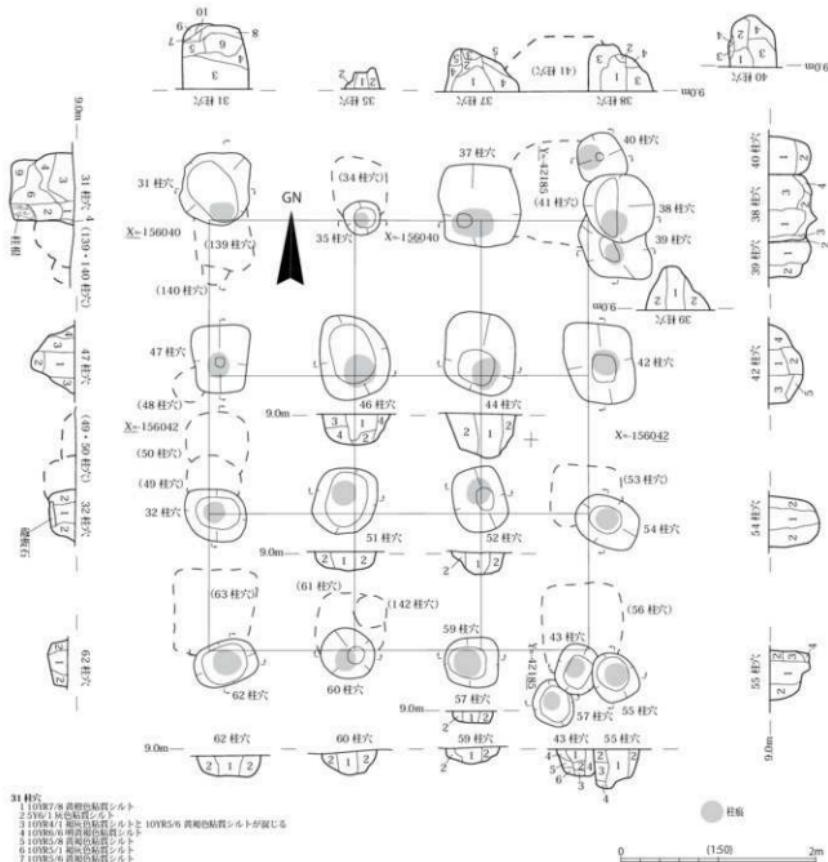
- 1 10YR4/2 黄褐色點斑シルト
2 10YR5/6 黄褐色點斑シルト
3 10YR4/1 開状褐色點斑シルト

3-1073

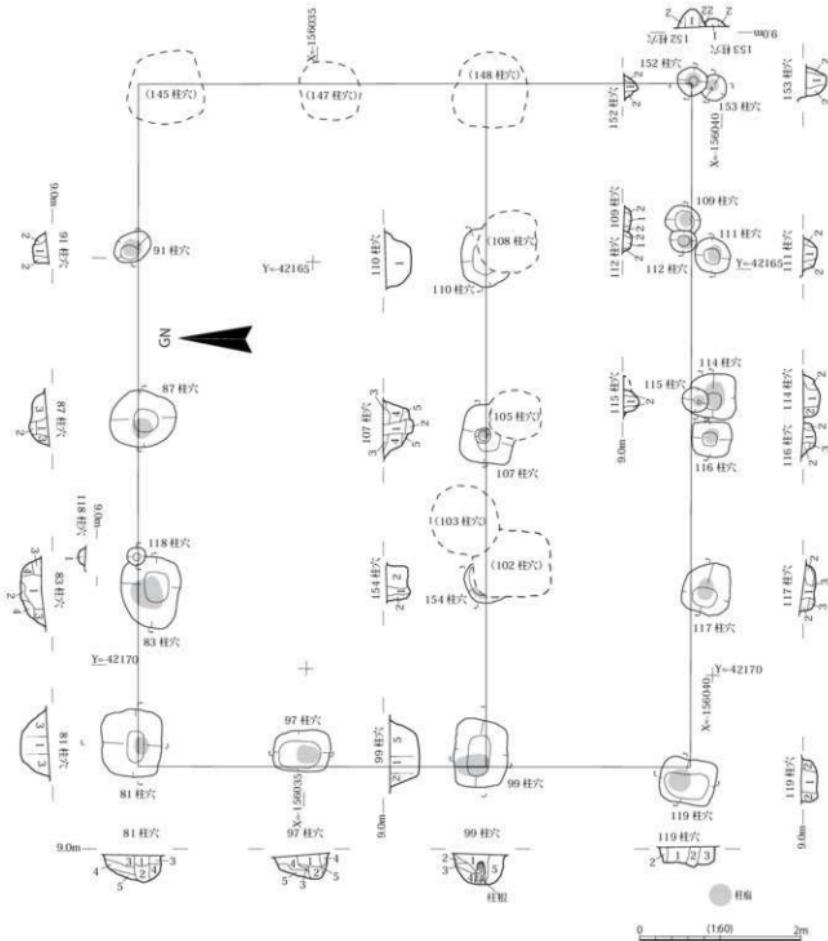
- 4 10YR5/1 緑秋色貼質シルト
 - 4 10YR5/1 緑秋色貼質シルトと 10YR5/8 黄褐色貼質シルトが混じる
 - 5 10YR5/8 黄褐色貼質シルト
 - 6 2.5Y4/1 青灰褐色貼質シルト

139 of 53

- 110YR5/1 和灰色貼賣シルトと 10YR8/6 明黃褐色貼賣シルトが混じる
210YR8/6 明黃褐色貼賣シルトと 10YR8/1 和灰色貼賣シルトが混じる
140粒穴



第7図 掘立柱建物1B 平・断面図 1:50



81 柱穴

- 1 10YR4/1 暗赤色暗緑色刷り粒質シルト
- 2 7.5YR4/1 黄褐色暗緑色シルトと 10YR7/6 褐鉛色暗緑色シルトが混じる
- 3 7.5YR4/1 黄褐色暗緑色シルトと 10YR7/6 褐鉛色暗緑色シルト
- 4 2.5YR4/1 黄褐色暗緑色シルトと 10YR7/6 褐鉛色暗緑色シルトが混じる
- 5 10YR7/6 黄褐色暗緑色シルトと 10YR5/1 黄褐色砂質シルトが混じる

83 柱穴

- 1 10YR4/4 暗赤色暗緑色刷り粒質シルトと 10YR6/6 明黄色暗緑色刷り粒質シルトが混じる
- 2 7.5YR4/1 黄褐色暗緑色シルト
- 3 10YR5/3 黄褐色暗緑色シルト
- 4 10YR5/3 黄褐色暗緑色シルトと 10YR4/1 暗赤色暗緑色シルトが混じる

85 柱穴

- 1 10YR5/6 黄褐色暗緑色シルト
- 2 7.5YR4/1 黄褐色暗緑色シルト
- 3 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルトと 10YR4/4 暗赤色暗緑色シルトが混じる (相拌混じり)

91 柱穴

- 1 10YR5/3 暗赤色暗緑色刷り粒質シルトと 10YR6/6 明黄色暗緑色刷り粒質シルトが混じる (相拌混じり)

97 柱穴

- 1 10YR5/6 黄褐色暗緑色シルトと 10YR6/6 明黄色暗緑色刷り粒質シルトが混じる (相拌混じり)
- 2 2.5YR4/1 暗赤色暗緑色シルト
- 3 10YR5/6 黄褐色暗緑色シルト
- 4 10YR5/3 黑褐色暗緑色シルト
- 5 10YR5/6 黄褐色暗緑色シルト

99 柱穴

- 1 10YR5/1 暗赤色暗緑色シルト
- 2 10YR5/1 黄褐色暗緑色シルトと 10YR4/6 暗赤色暗緑色シルトが混じる
- 3 10YR5/1 黄褐色暗緑色シルト
- 4 10YR5/6 黄褐色暗緑色シルトと 2.5YR4/1 暗赤色暗緑色シルトが混じる
- 5 10YR5/1 黑褐色暗緑色シルトと 10YR5/6 黄褐色暗緑色シルトが混じる

107 柱穴

- 1 10YR7/6 明黄色暗緑色刷り粒質シルトと 10YR4/2 暗赤色暗緑色シルト
- 2 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルトと 10YR6/6 黄褐色暗緑色シルトが混じる
- 3 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルト
- 4 10YR4/1 黄褐色暗緑色刷り粒質シルト
- 5 10YR7/6 明黄色暗緑色シルトが混じる (相拌混じり)

109 柱穴

- 1 10YR4/4 暗赤色暗緑色シルト
- 2 10YR6/4 暗赤色暗緑色シルト
- 3 10YR4/4 黄褐色暗緑色シルト
- 4 10YR7/4 暗赤色暗緑色シルトと 10YR7/4 暗赤色暗緑色シルトと 10YR5/1 黄褐色暗緑色シルトが混じる

110 柱穴

- 1 10YR2/1 暗赤色暗緑色シルト
- 2 10YR4/4 暗赤色暗緑色シルト
- 3 10YR4/4 黄褐色暗緑色シルト
- 4 10YR4/4 黄褐色暗緑色刷り粒質シルト

114 柱穴

- 1 10YR4/1 暗赤色暗緑色シルト
- 2 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルト
- 3 10YR4/1 黄褐色暗緑色刷り粒質シルト

115 柱穴

- 1 10YR4/1 暗赤色暗緑色シルト

116 柱穴

- 1 10YR4/1 黑褐色暗質シルト

116 柱穴

- 1 10YR4/1 黑褐色暗質シルト
- 2 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルト
- 3 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルトと 10YR4/4 黄褐色暗緑色シルトが混じる
- 4 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルトと 10YR4/4 黄褐色暗緑色シルトが混じる (相拌混じり)

119 柱穴

- 1 10YR4/2 黄褐色暗緑色刷り粒質シルトと 10YR5/2 黄褐色暗緑色シルト
- 2 10YR5/2 黄褐色暗緑色シルト

122 柱穴

- 1 10YR4/2 黄褐色暗緑色刷り粒質シルトと 10YR5/2 黄褐色暗緑色シルトが混じる (相拌混じり)
- 2 10YR5/2 黄褐色暗緑色シルト

123 柱穴

- 1 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルト
- 2 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルト
- 3 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルトと 10YR4/4 黄褐色暗緑色シルトが混じる

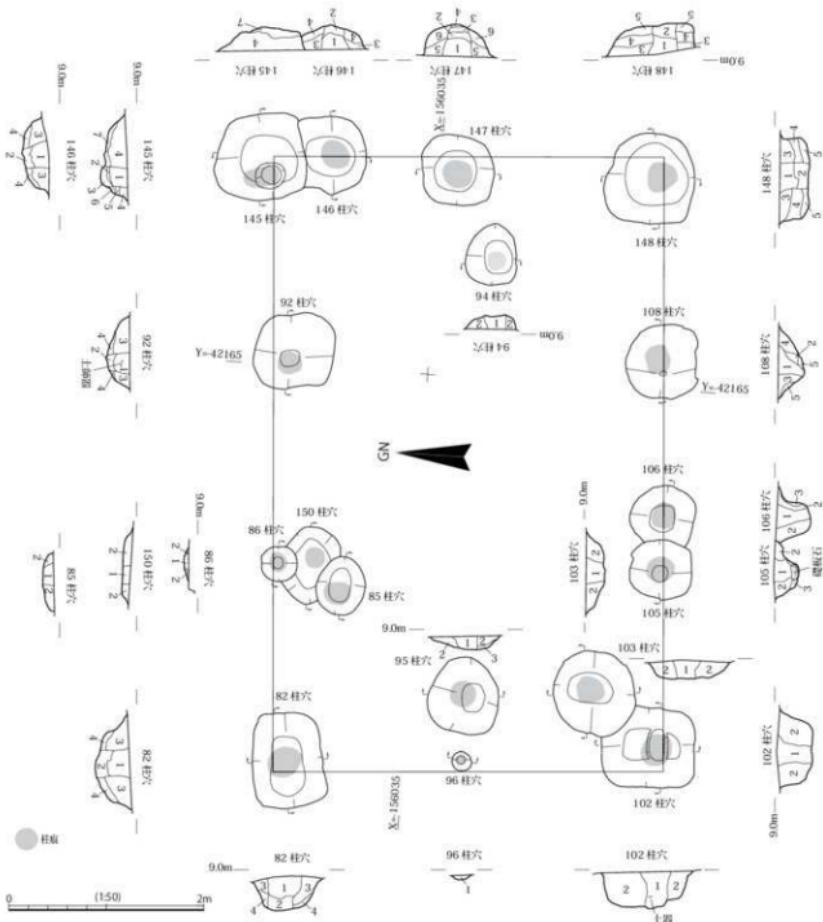
124 柱穴

- 1 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルト

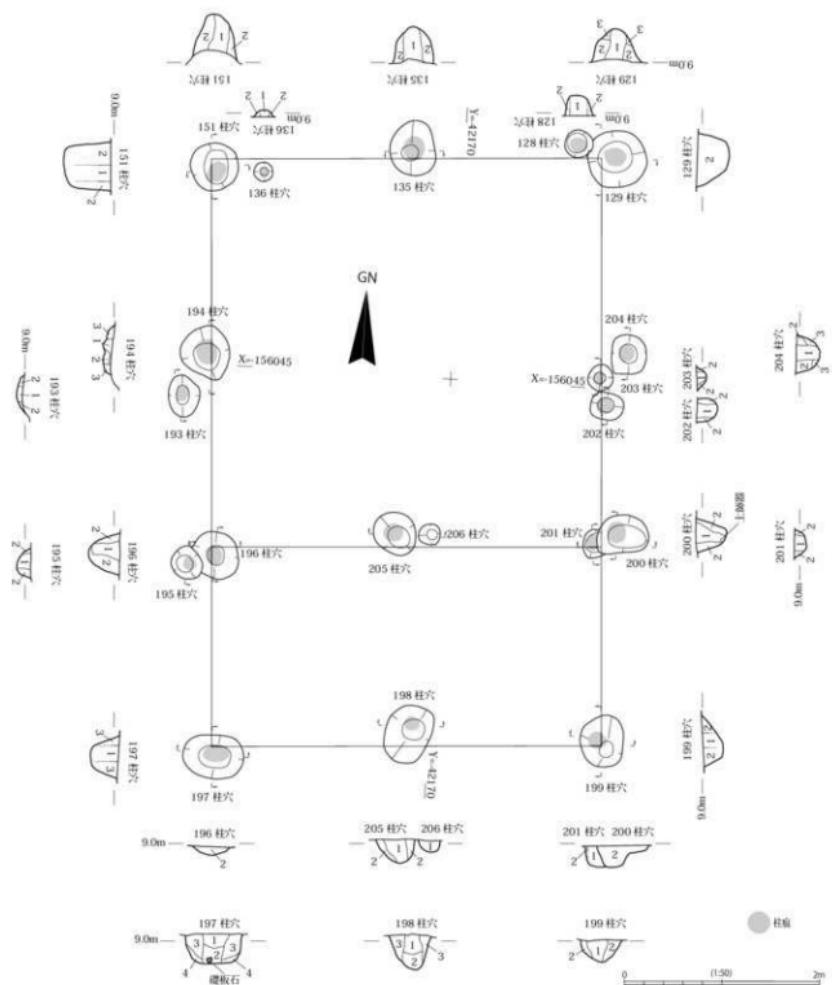
125 柱穴

- 1 10YR4/1 黄褐色暗緑色シルト

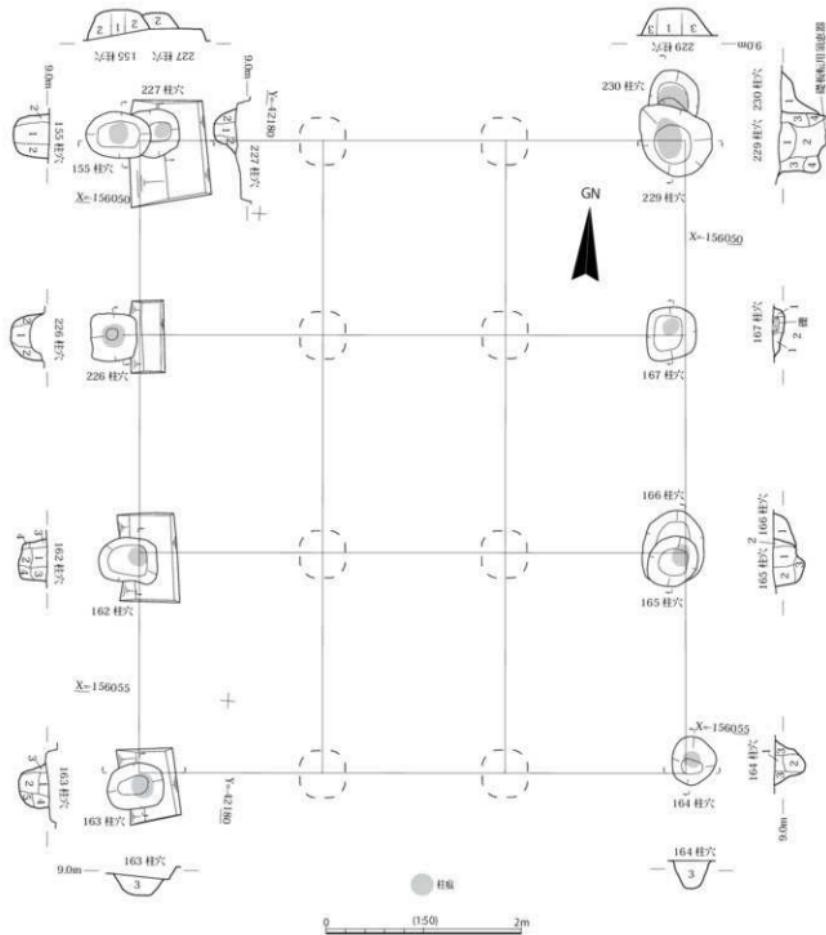
第8図 掘立柱建物 2 A 平・断面図 1:60



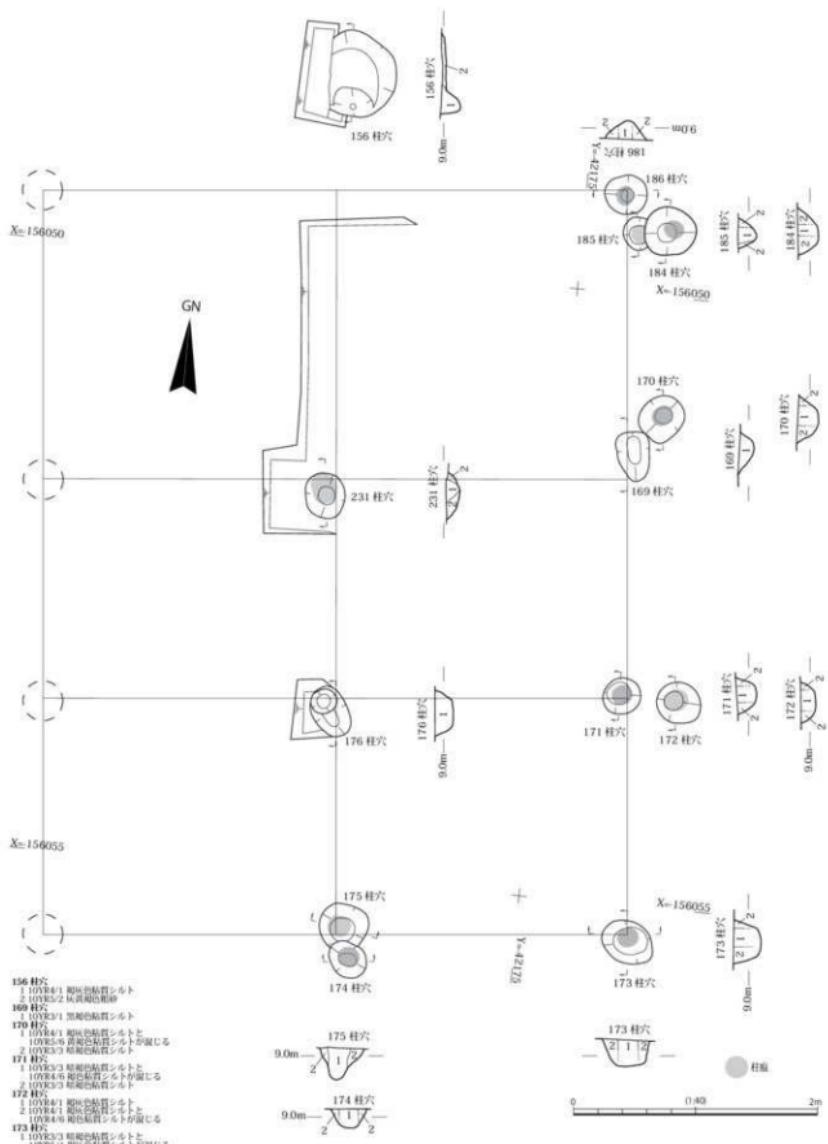
第9図 掘立柱建物2B 平・断面図 1:50



第10図 据立柱建物3 平・断面図 1:50

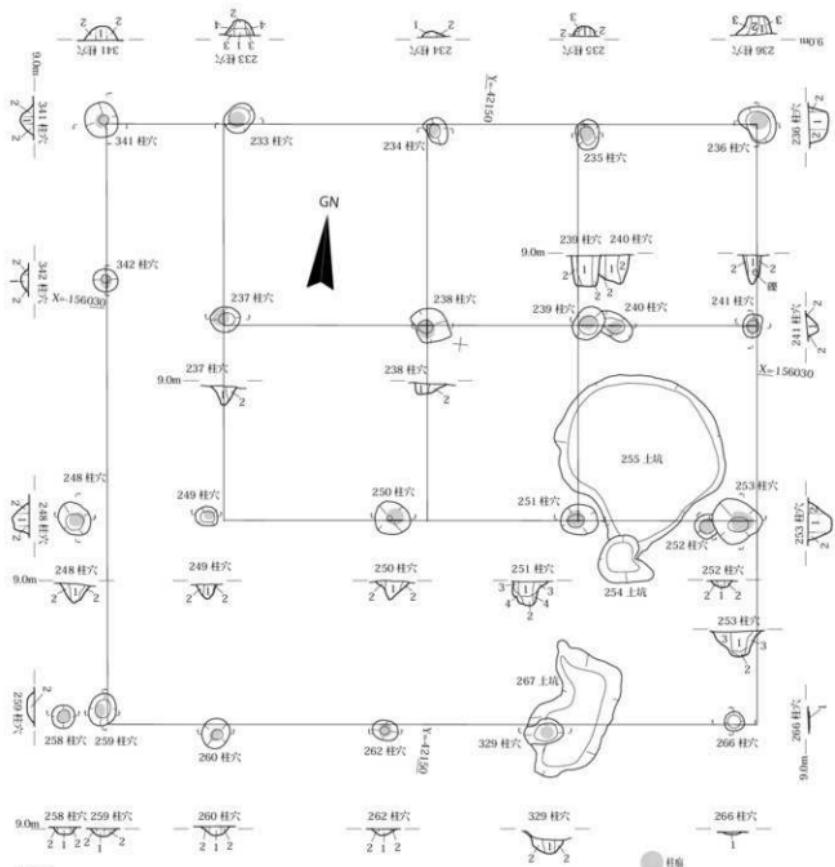


第11図 据立柱建物4-A 平・断面図 1:50

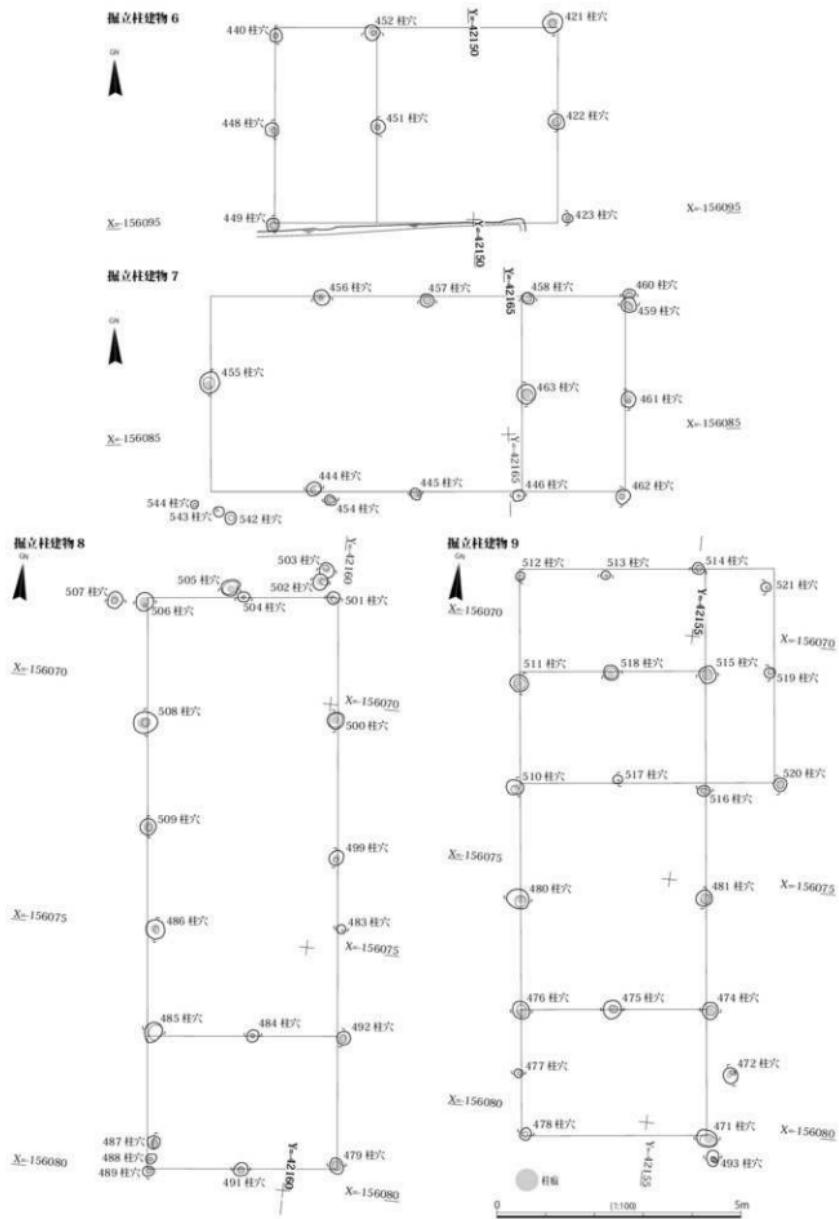


第12図 据立柱建物4日 平・断面図 1:40

186 杜六
1 LOYR4/1 橙灰色貼面シルト
2 LOYR3/3 橙灰色貼面シルト
231 HD:
1 LOYR4/1 橙灰色粗砂岩にり貼面シルト

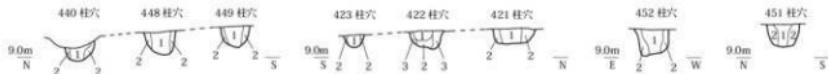


第13図 据立柱建物5 平・断面図 1:60



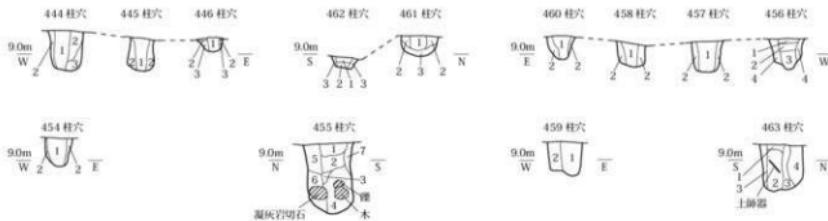
第14図 捶立柱建物6・7・8・9 平面図 1:100

据立柱建物 6

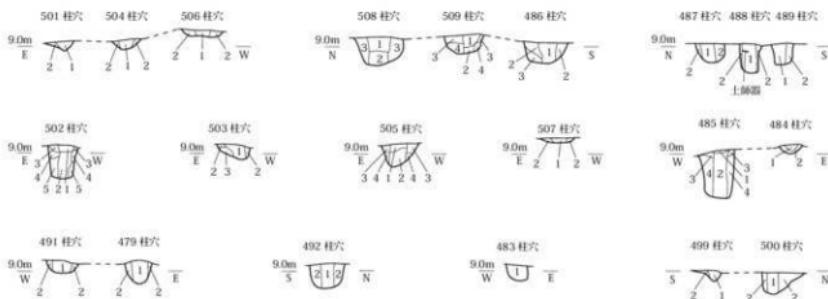


◎破綻は離れていることを示す。距離は任意

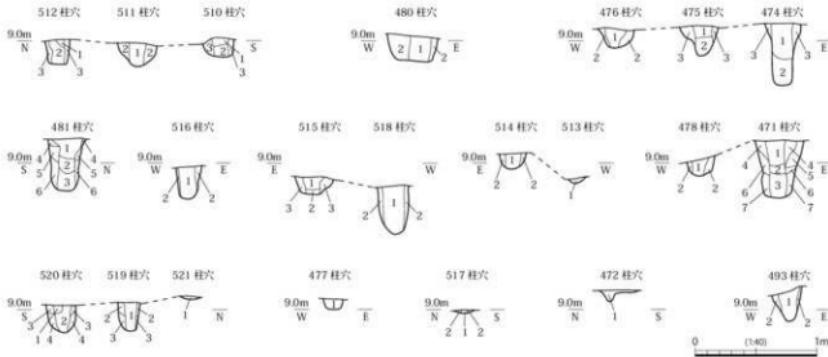
据立柱建物 7



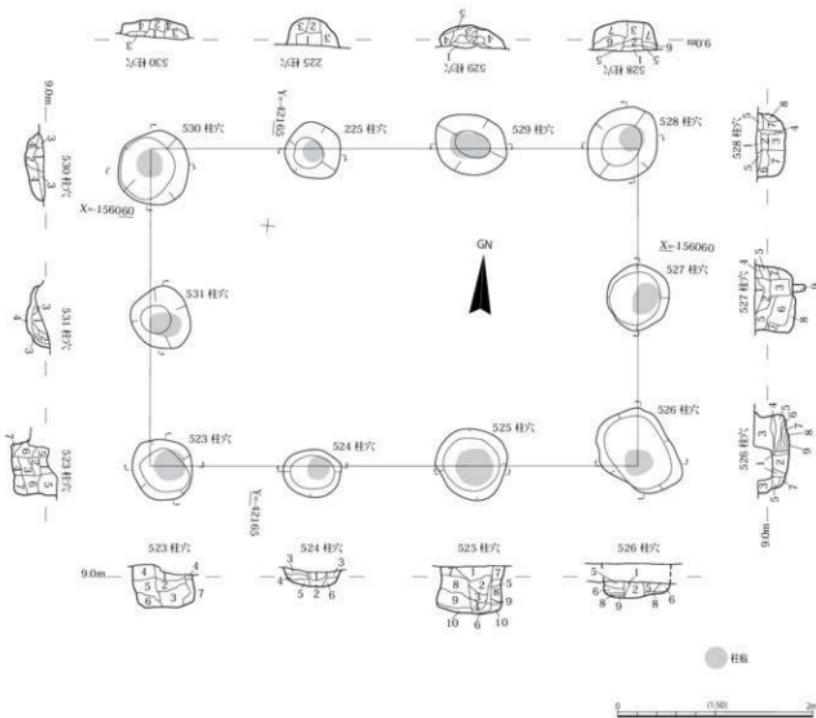
据立柱建物 8



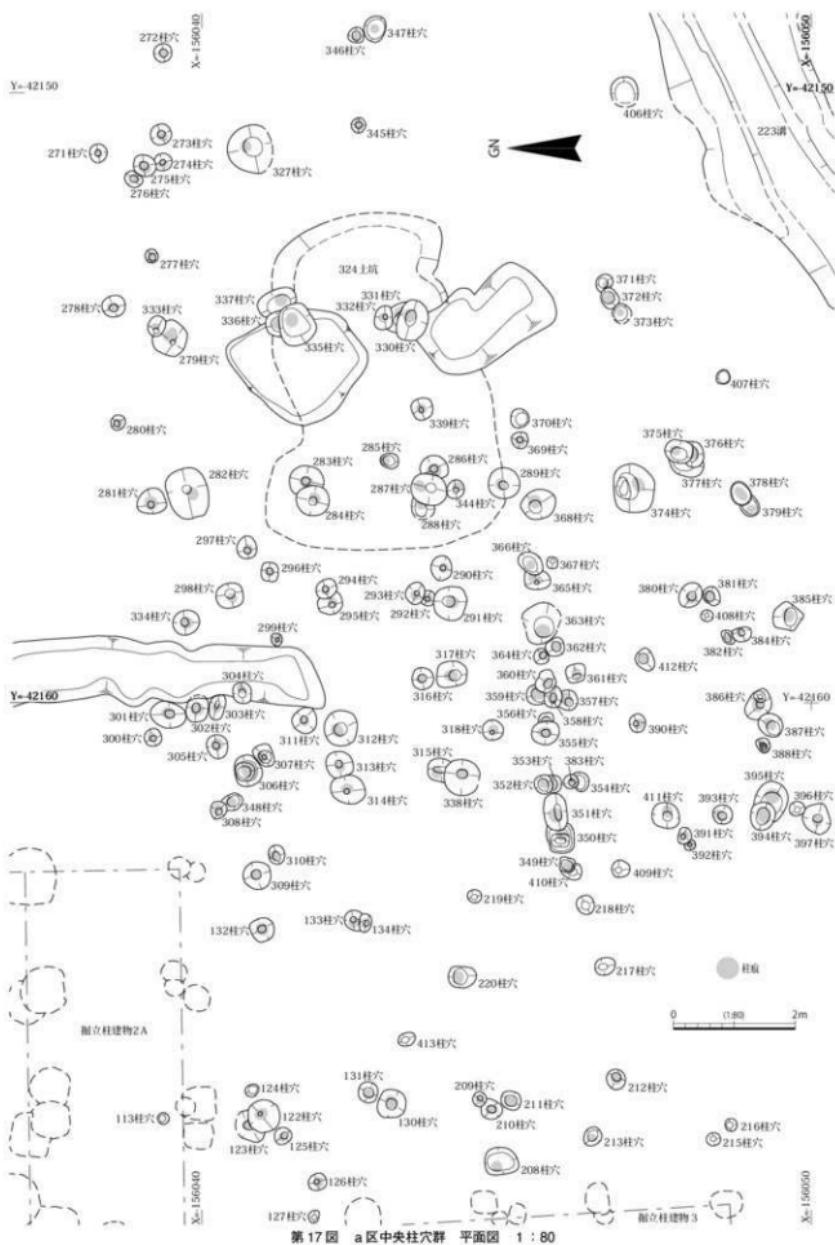
据立柱建物 9



第 15 図 据立柱建物 6・7・8・9 断面図 1:40



第16図 掘立柱建物10 平・断面図 1:50



第17図 a区中央柱穴群 平面図 1:80

表1 a区中央柱群一覧表（1）

※計測値の（）は残存値または推定値

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	理 土	出 土 遺 物
113 穴六	19	9	5	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト	須恵器(鉢)
122 穴六	54	52	23	1 10YR3/2 黒褐色粘質シルト 2 10YR3/4 褐褐色粘質シルト	土師器(白色系鉢, 楠甌), 須恵器(盤), 黒色土器(印加陶), 蒔塗土器
123 穴六	51	(48)	17	1 10YR7/3 に赤い黄褐色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 3 10YR6/4 に赤い黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
124 穴六	24	20	13	1 10YR3/1 黑褐色粘質シルト	土師器(器種不明), 須恵器(器種不明)
125 穴六	29	27	9	1 10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR3/4 褐褐色粘質シルト	土師器(器種不明)
126 穴六	30	28	8	1 10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR3/4 褐褐色粘質シルト	出土遺物なし
127 穴六	22	18	5	1 10YR3/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
130 穴六	47	46	34	1 10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 3 10YR6/4 明黄褐色粘質シルト 4 10YR4/2 黄褐色粘質シルト	土師器(器種不明), 須恵器(器種不明), 黑色土器(A類似)
131 穴六	34	33	11	1 10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR3/4 褐褐色粘質シルト	出土遺物なし
132 穴六	39	39	19	1 10YR3/2 黑褐色粘質シルト 2 10YR2/1 黑褐色粘質シルト	土師器(黄), 塗装土器
133 穴六	32	31	13	1 10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
134 穴六	31	(14)	18	1 10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
208 穴六	55	45	5	1 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 2 10YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
209 穴六	24	23	16	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 2 10YR5/1 褐灰色粘質シルト	出土遺物なし
210 穴六	35	33	13	1 10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR4/2 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
211 穴六	36	31	25	1 10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR4/2 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
212 穴六	34	31	12	1 10YR5/1 褐灰色粘質シルトと 10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR6/8 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
213 穴六	33	28	11	1 10YR4/2 黄褐色粘質シルト 2 10YR5/1 褐灰色粘質砂凝じりシルト	出土遺物なし
215 穴六	24	21	5	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト	出土遺物なし
216 穴六	21	20	4	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト	出土遺物なし
217 穴六	34	28	14	1 10YR3/3 黑褐色粘質シルトと 10YR5/8 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
218 穴六	32	29	22	1 10YR3/4 褐褐色粘質シルト	出土遺物なし
219 穴六	24	22	18	1 10YR5/1 褐灰色粘質シルト	出土遺物なし
220 穴六	47	35	29	1 10YR6/6 明黄褐色粘質シルトと 10YR4/3 に赤い黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/2 黑褐色粘質シルトと 10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
271 穴六	31	29	9	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR5/1 褐灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
272 穴六	31	30	8	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR5/1 褐灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
273 穴六	34	34	11	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR7/8 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
274 穴六	30	28	8	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR5/1 褐灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
275 穴六	37	36	13	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR6/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
276 穴六	30	24	10	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR6/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR7/8 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
277 穴六	22	21	15	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR5/1 褐灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
278 穴六	39	36	30	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR5/1 褐灰色粘質シルトが混じる 1 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR6/3 に赤い黄褐色粘質シルトと 10YR4/4 褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
279 穴六	56	53	38	2 10YR2/3 黑褐色粘質シルトと 10YR5/3 褐色粘質シルトが混じる 3 10YR5/1 褐灰色粘質シルト 4 10YR5/6 黄褐色粘質シルトと 10YR2/3 褐色粘質シルトと 10YR4/1 褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
280 穴六	26	23	9	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR5/1 褐灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
281 穴六	48	42	19	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR3/4 褐褐色粘質シルトが混じる 2 10YR4/4 褐色粘質シルトと 10YR5/1 褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
				1 10YR5/1 褐灰色粘質シルトと 10YR4/1 褐色粘質シルトと 10YR3/4 褐褐色粘質シルトが混じる	
282 穴六	91	82	42	2 10YR4/6 黑褐色粘質シルトと 10YR3/2 黑褐色粘質シルトが混じる 3 10YR2/2 黑褐色粘質シルト 4 10YR4/1 褐色粘質シルト 5 10YR2/1 黑色粘質シルトと 10YR5/1 褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
283 穴六	57	36	31	1 10YR5/1 褐灰色粘質シルトと 10YR3/4 褐褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
284 穴六	55	50	35	1 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR3/4 褐褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/1 黑褐色粘質シルトと 10YR4/6 褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
285 穴六	30	25	7	1 10YR4/1 褐色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR5/1 褐灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
286 穴六	46	(32)	23	1 10YR3/1 褐色粘質シルト 2 N4/0 菓加跡 3 10YR4/1 褐色粘質シルトと 10YR4/3 に赤い黄褐色粘質シルトが混じる 4 10YR4/2 黄褐色粘質	出土遺物なし
287 穴六	60	50	22	1 10YR5/1 褐色粘質シルトと 10YR3/4 褐褐色粘質シルトが混じる 2 7.5YR4/1 褐色粘質シルト 3 10YR5/3 に赤い黄褐色粘質	出土遺物なし
288 穴六	38	(18)	10	1 7.5YR3/2 黑褐色粘質シルト 2 10YR5/3 に赤い黄褐色粘質	出土遺物なし
289 穴六	52	51	53	1 10YR4/1 褐色粘質シルト 2 10YR4/1 褐灰色粘質シルトと 10YR5/1 褐灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし

表2 a区中央柱穴群一覧表(2)

※計測値の()は残存値または推定値

遺構番号	長軸 (m)	短軸 (cm)	深さ (cm)	理 土	出 土 遺 物
290 柱穴 40	34	29	1	10YR4/1 喀灰色粘質シルト 2 10YR4/1 喀灰色粘質シルトと10YR5/1 喀灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
291 柱穴 57	53	36	1	2.5YV4/1 黄褐色粘質シルト 2 10YR3/1 黒褐色粘質シルト	出土遺物なし
292 柱穴 25	(18)	8	1	10YR3/3 喀褐色粘質シルト 2 10YR4/2 喀褐色粘質シルト	出土遺物なし
293 柱穴 36	31	17	1	10YR4/1 喀灰色粘質シルト 2 10YR4/2 喀褐色粘質シルト	出土遺物なし
294 柱穴 36	30	18	1	10YR4/1 喀灰色粘質シルト 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR5/1 喀灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
295 柱穴 41	(27)	19	1	10YR5/1 喀褐色粘質シルト 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR5/1 喀褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
296 柱穴 30	28	8	1	10YR4/1 喀灰色粘質シルト 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR5/1 喀褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
297 柱穴 37	33	30	1	10YR4/1 喀灰色粘質シルト 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR5/1 喀褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
298 柱穴 45	41	16	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 喀褐色粘質シルトと10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
299 柱穴 21	18	7	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
300 柱穴 29	29	16	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 喀褐色粘質シルトと10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
301 柱穴 60	42	21	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルト 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR5/8 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
302 柱穴 440	36	16	1	10YR4/2 喀褐色粘質シルト 2 10YR3/2 喀褐色粘質シルト	出土遺物なし
303 柱穴 42	26	20	1	10YR5/1 喀褐色粘質シルト 2 10YR5/3/に高い黄褐色シルト	出土遺物なし
304 柱穴 35	32	16	1	10YR4/3 喀褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR5/1 喀褐色粘質シルト	出土遺物なし
305 柱穴 40	35	29	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 喀褐色粘質シルトと10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
306 柱穴 58	55	39	1	10YR5/1 喀褐色粘質シルトと10YR2/3 黒褐色粘質シルトが混じる 2 10YR5/1 喀褐色粘質シルトと10YR4/3/に高い黄褐色粘質シルトと10YR7/4/に高い黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
307 柱穴 42	(26)	27	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 喀褐色粘質シルトと10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
308 柱穴 30	27	15	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 喀褐色粘質シルトと10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
309 柱穴 47	46	24	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 喀褐色粘質シルトと10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
310 柱穴 32	26	25	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 喀褐色粘質シルトと10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
311 柱穴 43	41	30	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 喀褐色粘質シルトと10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
312 柱穴 59	54	25	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 喀褐色粘質シルトと10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
313 柱穴 42	44	19	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルト 2 10YR5/2 喀褐色粘質シルト	出土遺物なし
314 柱穴 55	47	14	1	10YR5/1 喀褐色シルト 2 10YR5/6/に高い黄褐色相疎	出土遺物なし
315 柱穴 37	(29)	21	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/3 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR5/4/に高い黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
316 柱穴 36	35	13	1	10YR5/1 喀褐色粘質シルト 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルト	出土遺物なし
317 柱穴 49	42	27	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルト 2 10YR5/1 喀褐色粘質シルト	出土遺物なし
318 柱穴 35	34	22	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR3/4 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 喀褐色粘質シルトと10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
327 柱穴 81	74	31	1	10YR5/1 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる 3 10YR4/1 喀褐色相疎 2 10YR6/6 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルト	上部砂層(Bn),中部(Bp), 底部土層(A類層)
330 柱穴 67	49	32	1	10YR3/1 喀褐色粘質シルトと10YR5/1 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/2 黑褐色粘質シルトと10YR5/8 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
331 柱穴 442	(11)	8	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルト 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR5/1 喀褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
332 柱穴 39	29	18	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルト 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR5/1 喀褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
333 柱穴 34	28	30	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルト 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR5/1 喀褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
334 柱穴 44	41	18	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR4/6 喀褐色粘質シルトと10YR5/3 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
335 柱穴 68	56	36	1	10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR4/6 喀褐色粘質シルトと10YR5/3 喀褐色粘質シルトが混じる 2 10YR4/1 喀褐色粘質シルトと10YR4/6 喀褐色粘質シルトと10YR5/3 喀褐色粘質シルトと10YR5/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
336 柱穴 40	22	12	1	10YR5/1 喀褐色粘質シルトと10YR4/6 喀褐色粘質シルトが混じる(相疎混じり) 2 10YR5/1 喀褐色相疎 1 10YR5/1 喀褐色粘質シルトと10YR4/2 喀褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる(相疎混じり)	出土遺物なし
337 柱穴 66	(39)	34	1	10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR5/1 喀褐色粘質シルト 3 10YR3/1 喀褐色粘質シルトと10YR4/6 喀褐色粘質シルトと10YR5/1 喀褐色粘質シルトが混じる 4 10YR4/2 喀褐色相疎	出土遺物なし
338 柱穴 60	59	25	1	10YR3/1 喀褐色粘質シルトと10YR4/6 喀褐色粘質シルトと10YR5/1 喀褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし

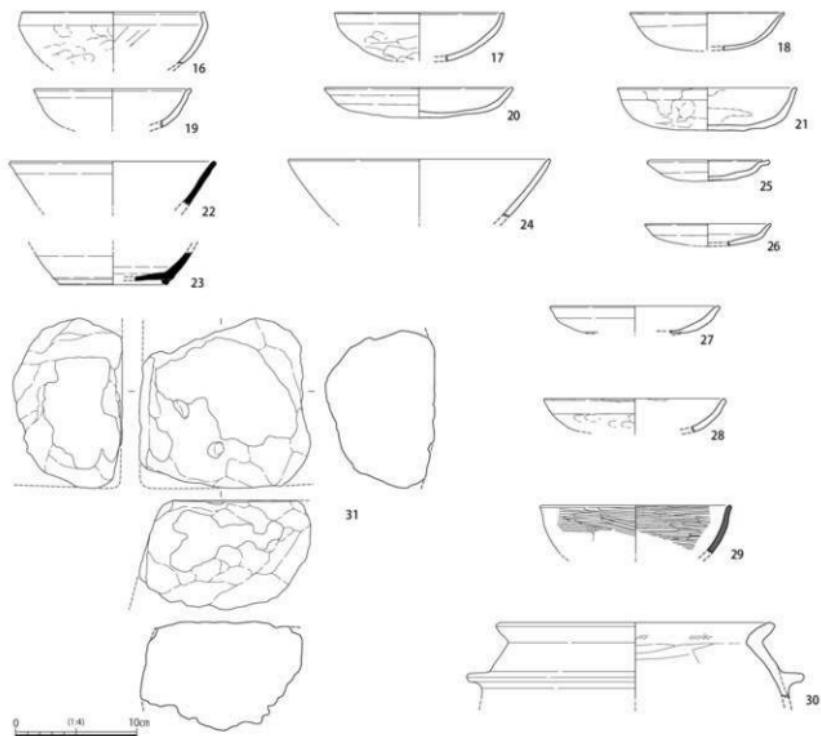
表3 a区中宋桂穴群一管素(3)

無計測箇所の〇は残存箇または根元部

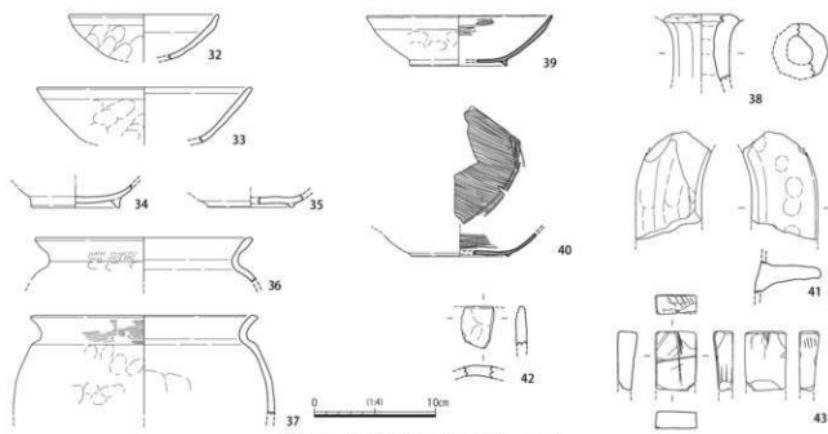
表4 a区中央柱穴群一覧表(4)

※計測値の()は残存値または推定値

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋 土	出 土 遺 物
375 柱穴 46	46	37	35	1 10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR3/4 周褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/3 周褐色粘質シルトと10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR6/6 明褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
376 柱穴 43	(18)	18	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト 2 10YR5/1 周褐色粘質シルト	出土遺物なし
377 柱穴 57	21	19	1	1 10YR6/8 明褐色粘質シルトと10YR5/1 周褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
378 柱穴 40	32	17	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR5/6 周褐色粘質シルトが混じる 2 10YR5/6 黒褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
379 柱穴 30	23	15	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト 2 10YR5/1 周褐色粘質シルト	出土遺物なし
380 柱穴 44	36	6	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/2 黑褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
381 柱穴 31	28	8	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト 2 10YR5/1 周褐色粘質シルト	出土遺物なし
382 柱穴 25	(17)	(7)	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/1 黑褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
383 柱穴 25	22	11	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト 2 10YR5/1 周褐色粘質シルト	出土遺物なし
384 柱穴 32	23	9	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト 2 10YR5/1 周褐色粘質シルト	出土遺物なし
385 柱穴 45	44	29	1	1 10YR4/2 周褐色粘質シルトと10YR6/6 明褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/2 黑褐色粘質シルトと10YR6/6 周灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
386 柱穴 50	38	13	1	1 10YR4/1 周褐色粘質シルト 2 10YR5/1 周褐色粘質シルト	出土遺物なし
387 柱穴 42	36	31	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト 2 10YR5/1 周褐色粘質シルトと10YR5/1 周褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
388 柱穴 26	21	10	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト 2 10YR5/1 周褐色粘質シルトと10YR5/1 周褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
390 柱穴 30	26	14	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/1 黑褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
391 柱穴 28	23	11	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/1 黑褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
392 柱穴 19	(14)	9	1	1 10YR4/1 周褐色粘質シルト 2 10YR5/1 周灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
393 柱穴 33	32	15	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/1 黑褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
394 柱穴 47	42	13	1	1 10YR4/4 周褐色粘質シルトと10YR6/6 明褐色粘質シルトが混じる(粗砂混じり) 2 10YR4/4 周褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトと10YR4/1 周灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
			1	1 10YR5/1 周灰色粘質シルトと10YR6/6 明褐色粘質シルトが混じる(粗砂混じり) 2 10YR5/1 周褐色粘質シルトと10YR3/4 周褐色粘質シルトが混じる	
395 柱穴 53	(37)	35	3	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト 2 10YR5/1 周褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルト 6 10YR5/1 周灰色粘質シルトと10YR7/4 に、黑褐色と10YR5/6 黄褐色粘質シルトと10YR4/1 周灰色粘質シルトが混じる(粗砂混じり)	出土遺物なし
396 柱穴 26	24	12	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト	出土遺物なし
397 柱穴 50	43	35	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/1 黑褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 3 10YR3/1 黑褐色粘質シルトと10YR6/1 周灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
406 柱穴 44	(31)	7	1	1 10YR5/1 周褐色粘質シルト	出土遺物なし
407 柱穴 23	23	14	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト	出土遺物なし
408 柱穴 20	19	6	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト	出土遺物なし
409 柱穴 30	28	7	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト	土器(器種不明), 陶器器(器)
410 柱穴 28	(16)	9	1	1 10YR5/1 周灰色粘質	出土遺物なし
411 柱穴 46	42	10	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR5/8 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
412 柱穴 36	30	27	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR5/1 周褐色粘質シルト	出土遺物なし
413 柱穴 30	22	17	1	1 10YR4/1 周灰色粘質シルト	出土遺物なし



第18図 捜立柱建物 出土遺物図 1:4



第19図 その他の柱穴 出土遺物図 1:4

(2) 溝

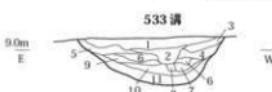
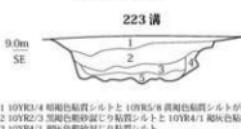
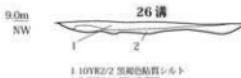
[26溝] (第20図・図版12)

a区西半で検出した。南南西~北北東方向に流れる溝である。検出長は約31mで、幅は1.2~1.9m、深さは15~20cmを測る。断面形状は、皿状で浅い。遺構の南端は、調査区外に伸びる。北端は、南北方向の小溝により切られており、それ以東、以北にはその痕跡を見いだせない。おそらく南北小溝と流向を同じくするために痕跡が認められないであろう。出土遺物は、土師器壺、黒色土器B類碗があるが、少量で小片のみであった。

[223溝] (第20・21・22図、図版12・17・18・19・20)

a区全調査区の中央を南西方向から北東方向に横断する溝である。平面形状は直線的で、検出長は57mである。遺構の西端と東端はいずれも調査区外へ伸びており、東側は、参考文献2に示す東隣の発掘調査区における45溝に合致する。幅1.1~2.4mであるが、概ね1.5mである。深さは40cmで、断面形状は、逆台形を呈する。

出土遺物は、弥生土器壺又は壺、土師器皿・小皿・椀・高杯・鉢・壺・羽釜・把手・須恵器杯・蓋・壺・瓶子・水滴・器台・壺、黒色土器A類碗・丸瓦・平瓦、製塩土器、砥石、円筒埴輪が出土している。第21・22図44~105に図示する。皿と椀との区分が曖昧であるが、44~60は土師器皿、61~70は土師器椀とする。皿・椀ともいずれも口縁部のみをヨコナデし、体部はユビオサエを残し、ヘラケズリなどは認められない。椀は高台があるものとないものがある。71~73は土師器壺、74~77は土師器鉢、78は黒色土器A類碗である。平底で、内面のヘラミガキが緻密である。79~80は須恵器蓋で、79は皿蓋、80は杯蓋と思われる。81~86は須恵器杯である。87~93・95~97は須恵器壺であるが、87~91の小型のものは瓶子とする。91はいわゆる壺Gとされるもので完形品である。平安京東三坊大路S D 650 A、平安京



1. 10YR4/4 黒褐色粘質シルトと 10YR5/6 黒褐色粘質シルトが混じる(相鉛面)。
2. 10YR2/2 黑褐色粘質シルトと 10YR4/1 黑褐色粘質シルトが混じる
3. 10YR4/1 黑褐色粘質シルトが混じる
4. 10YR4/1 黑褐色粘質シルトと 10YR6/6 明褐色粘質シルトが混じる
5. 7.5YR3/4 黑褐色粘質シルトと 10YR6/6 明褐色粘質シルトが混じる(相鉛面)。

左京七条二坊一町 S D 64 出土のものと類似する。97は鉢である可能性もある。底部外面が平滑になっており、擦過痕も認められることから、墨痕が認められないものの転用鏡である可能性も考えられる。94は須恵器で、平瓶形の水滴である。98は須恵器壺、99~105が製塩土器である。瓦は、丸瓦と平瓦があり、図版20(160~163)に示す。160~162は平瓦で、凸面は繩目タタキである。163は丸瓦で、行基式丸瓦の縁部である。いずれも焼痕が認められる。

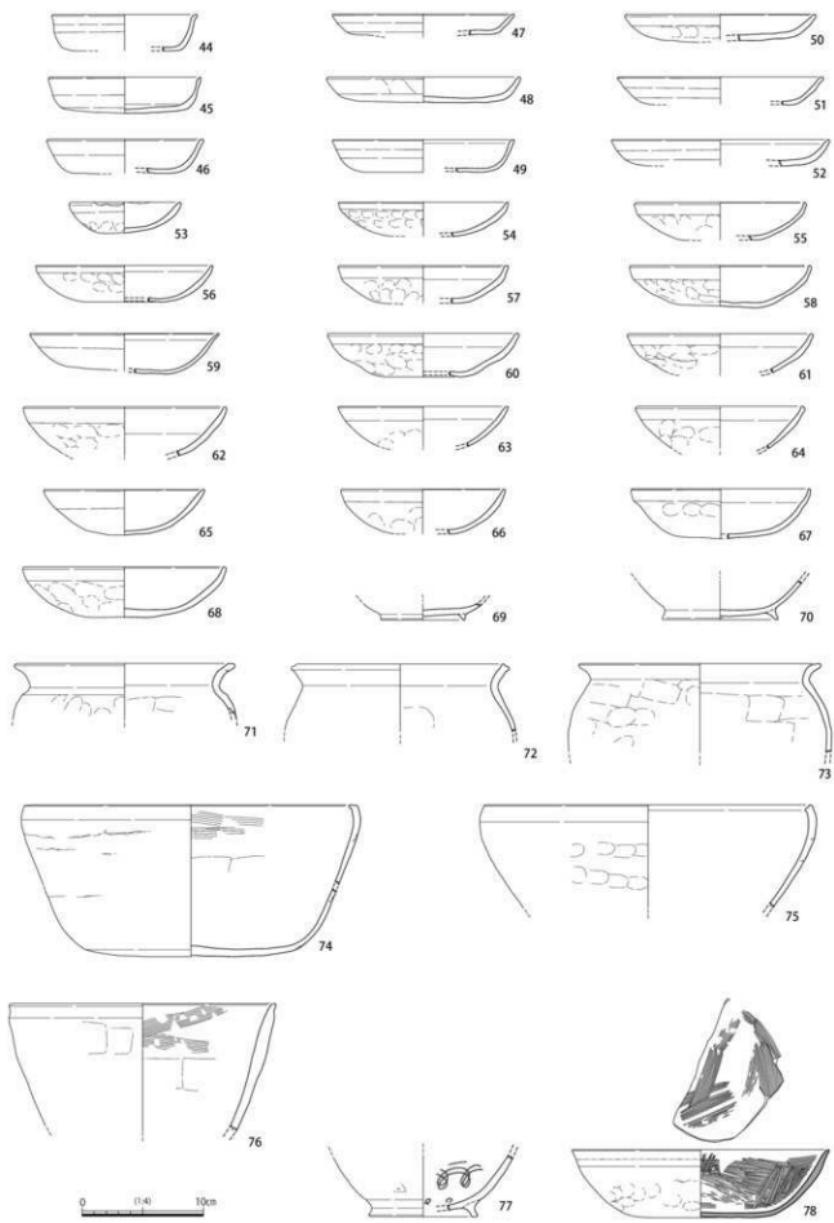
[533溝] (第20・22図、図版13・20)

a区とb区境の中央付近で検出された南北方向の溝である。233溝に取り付く形状で、223溝とは同一遺構と考える。長さは44m、幅は1.1mで、深さは40cmである。南に行くにつれて幅が細くなり深さも浅くなっている終息する形状である。

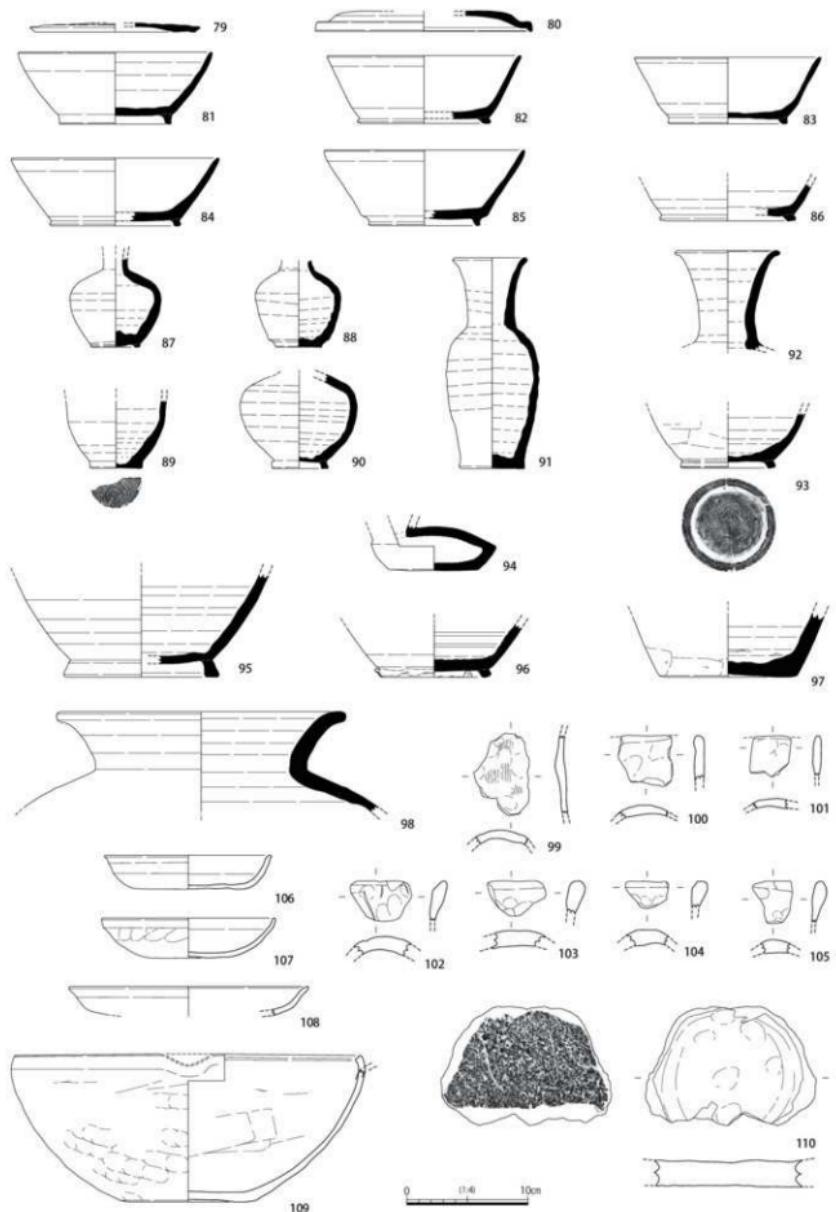
出土遺物は、弥生土器壺又は壺、土師器皿・皿・壺・鉢、製塩土器、平瓦がある。第22図106~110に示す。106~108は土師器皿である。109は大型の土師器片口鉢である。110は弥生土器で、壺又は壺の平底の底部である。厚みが26mmほどあり、弥生時代前期~中期の大型品であったと思われる。他の出土遺物からみて明らかに二次混入遺物であるが、形状が、厚みのある平坦な土板でもあるので、拾得したものを何らかの用途に二次使用したものとも考えられる。なお外面に著しい初圧痕が認められる。

[432溝] (第20図、図版12)

b区南東端で、調査区を横断する西北西~東南東方向の溝である。直線形状で、検出長は12m、幅は60cm、深さは30cmである。東西両端とも調査区外に伸びており、東側は、参考文献2に示す東隣調査区の458溝に合致する。西側は隣地を越えた延長推定箇所には見当たらず終息しているようである。出土遺物はなかった。



第21図 223溝 出土遺物図 (土師器・黒色土器) 1:4



第22図 223溝(須恵器・製塙土器)・533溝 出土遺物図 1:4

(3) 井戸

[326 井戸] (第23図、図版13・21)

a区東半中央付近で検出したものである。平面形状は、不整円形状で、南北は1.7m、東西は1.6mを測る。深さは10mである。断面形状は漏斗状を呈し、底部に行くにしたがい直径が小さくなる形状である。基底部は、埋没河川と思われる湧水粗砂層で、井戸水脈である。井筒等の出土はなく、埋土土層からもその存在は窺われない。素掘り井戸である。

出土遺物は少ないが、土器器輪・甕・羽釜、瓦器輪、輸入青磁碗が認められる。第23図に出土遺物を示す。

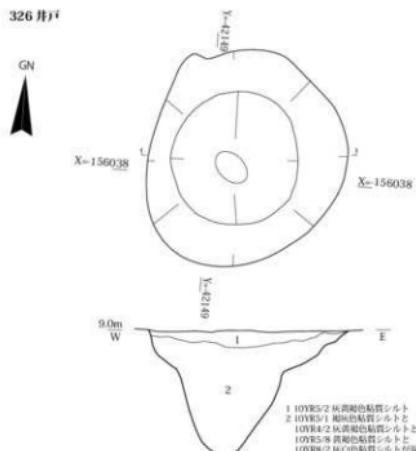
112、113とも瓦器輪である。内面はヘラミガキを施す。高台は大きく外傾して張っている。時期的には、瓦器輪編年表の尾上編年II-2期相当で、12世紀後半の所産と考えられる。類似する遺物を出土する掘立柱建物5、254・255土坑との関連が考えられる。建物に付随する生活用水井戸であった可能性が考えられるものである。

[433 井戸] (第23図、図版13・21)

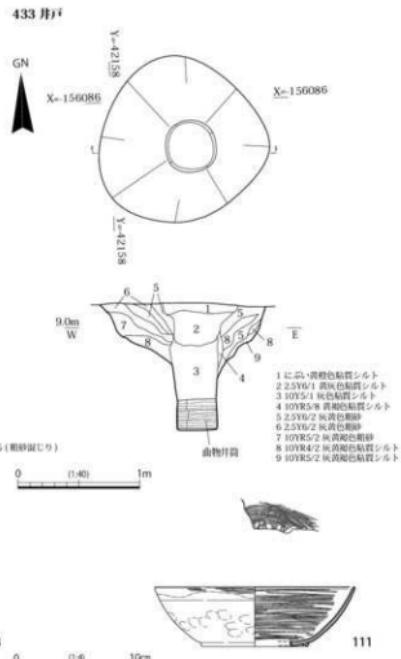
b区中央南で検出した。不整円形状のもので、南北1.3m、東西1.4m、深さ1.1mである。基底部には、直径約40cm、高さ20cmの曲物を確認することができた。井筒として利用されたものの基底部と思われる。埋土土層では、中央の井筒痕跡は曲物の上端からさらに検出遺構面近くまで立ち上がっており、本來の井筒は、検出遺構面近くまで積み上げてあったものと推察できる。曲物遺存箇所は、ほぼ掘方埋土がなく曲物井筒と同じ大きさの掘方規模しかない。基底部は、埋没河川と考えられる湧水粗砂層で、井戸水脈である。調査中も湧水が著しく、調査途中において基底部は崩落崩壊した。

出土遺物は、少量で小片ばかりではあったが、土器器輪、須恵器、黒色土器A類輪、黒色土器B類を認める。そのうち図示できたのは、第23図111に示すもののみである。111は黒色土器A類輪で、内面のヘラミガキが緻密である。少量小片の遺物で時期決定はし難いが、概ね10世紀後半～末頃のものと思われる。位置的に掘立柱建物8・9との関連する生活用水井戸と考えたい。

326 井戸



433 井戸



第23図 326・433 井戸 平・断面図 1:40 出土遺物図 1:4

(4) 土坑

[254 土坑] (第24図、図版13・21)

a区東半北方で検出されたものである。南北60cm、東西65cm、深さは10cmの規模で、平面形状は、台形状とも隅丸方形状とも円形状とも言いきれない不整形で、断面形状は、浅い皿状である。出土遺物は、土師器小皿・羽釜、瓦器椀、須恵器甕である。図示できたのは瓦器椀で、第24図116に示す。瓦器椀編年の尾上編年II-1~2期相当と思われ、12世紀中頃~後半のものと思われる。掘立柱建物5内(底内)にあって、後述する255土坑とも関連する遺構と考える。

[255 土坑] (第24図、図版14・21)

a区東半北方で検出されたものである。南北22m、東西2.1mの規模で、平面形状は、その北半は井戸のような円形状を呈し、南半は南に向かって漏斗状に窄まっていく形状を呈している。深さは10cmで、平面規模に比して非常に浅く、底面は平坦である。

出土遺物は、土師器小皿・羽釜、須恵器甕、黒色土器A類椀、瓦器椀、輸入白磁碗である。図示できたものは、第24図114土師器小皿と115瓦器椀である。瓦器椀は、瓦器椀編年の尾上編年II-1~2期相当と思われる。掘立柱建物5の主屋内にあって建物の関連施設である可能性が考えられる。また254土坑とは重複関係にはあるが、同一性が強い遺構であると考える。

[267 土坑] (第24図、図版14)

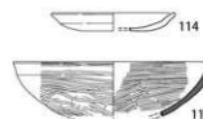
a区東半北方で検出されたものである。平面形状は、北東北~南南西方向の不整長方形で、長軸は165m、短軸は90cmである。深さは10cmで、断面形状は、浅い皿状を呈する。掘立柱建物5の底柱である329柱穴とは重複関係にある。土層上の整合関係では、267土坑の方が上位層にあたるが、掘立柱建物5内(底内)にあって建物との関連性を考える上では時期差とは言えないと考える。254・255土坑と267土坑は、形状、位置、掘立柱建物5との関連において一連のものと考えられる。出土遺物は、黒色土器B類椀の小片が出土しているが、図示できるものではなかった。

[404 土坑] (第25図、図版14・22)

a区南東端で検出したものである。北東~南西方向の長方形形状を呈しており、二条の南北方向の小溝により、その北東端と中央を損壊している。規模は、長軸20m、短軸1.1mで、深さは20cmである。断面形状は、浅い皿状を呈する。今回の調査においては、大半の遺構が褐色系あるいは黄灰色系の埋土であるのに404土坑は黒色系の粘質土層で他遺構との相違を認める。

出土遺物は、弦生土器で、遺存状態が不良なため、その観察に苦慮するところではあるが、甕または壺の底部~体部下半の同一個体土器群であると判断した。そのうち第25図117に接合復元可能となった部分を図示する。底径105mmを測る平底の底部で、時期決定は難しい

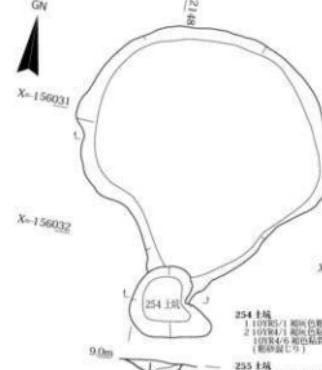
255土坑出土遺物



254土坑出土遺物



255土坑



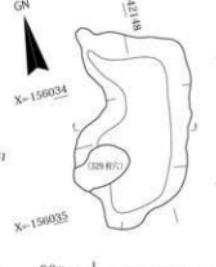
254土坑

1 107RS/1 相田色割離目録シルト
2 107RS/2 黒色粘土シルト
3 107RS/3 黒色粘土シルトが混じる
(粗砂含む)

2 107RS/1 相田色割離目録シルト
2 107RS/2 黒色粘土シルト
3 107RS/3 黒色粘土シルト

3 107RS/3 に黒色粘土シルト
(粗砂含む)

267土坑



267土坑

1 107RS/1 相田色割離目録シルト
2 107RS/2 黒色粘土シルト

3 107RS/3 黒色粘土シルト

254・255・267土坑 平・断面図 1:40

254・255土坑 出土遺物図 1:4

0 (34) 10cm

0 (40) 1m

が、弥生前期～中期前半頃のものと思われる。遺構の形状から土壙墓の可能性を考えるものである。

【434 土坑】(第 27・28 図、図版 14・21・22)

b 区中央南半で検出したものである。南北 29 m、東西 3.3 m で、平面形状は、不整形ではあるがやや方形状に近い。深さは 20 cm で、底部は平坦で、断面形状は、浅い皿状を呈する。

出土遺物は、土師器椀・鉢・把手、須恵器鉢用硯、黒色土器 A 類椀・鉢、縁羽口で、図化できたものを第 28 図 118 ～ 140 に示す。118 ～ 126 は土師器椀である。いずれも口縁部のみをヨコナデし、体部は指頭圧痕を残す。底部は平坦で、124 ～ 126 のように高台を付すものもみられる。127 ～ 134 は黒色土器 A 類椀である。口縁部をヨコナデし、体部には指頭圧痕を残す。内面はヘラミガキを施す。135、136 は黒色土器 A 類の鉢である。135 は片口鉢で、136 は底部に高台状の凸帯を巡らせるが、高台としての機能はないようと思われる。137 は土師器台付鉢の底部である。138、139 は縁羽口である。138 は円筒状呈しているが、139 は外面に面を施し、断面が八角形状を呈している。140 は須恵器鉢の高台付き底部であるが、底部外面（高台内径内）に擦過痕があり平滑化していることと内面見込みに打ち当たったよう

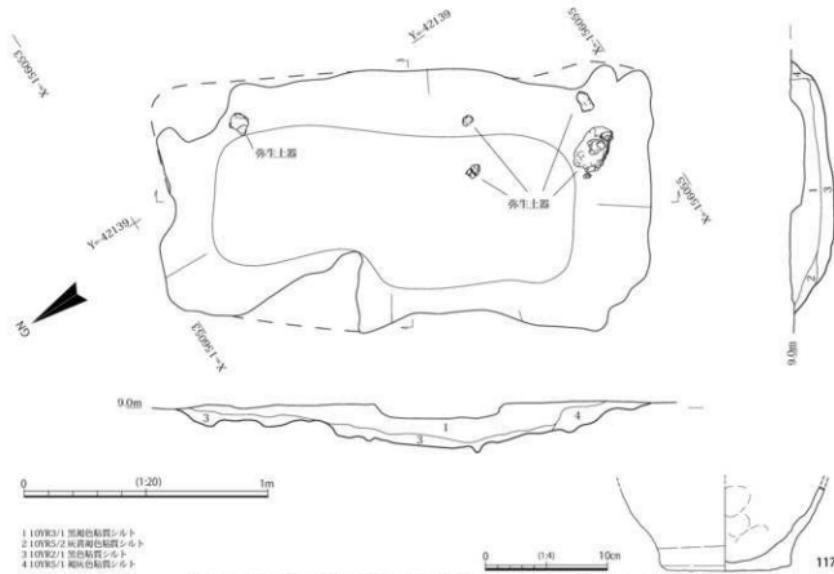
な痕跡が顕著にみられることから振え置き時の痕跡と考え、転用硯であると判断した。これらの遺物は一括性が高いものと思われ、概ね 10 世紀後半～末頃のものと考える。434 土坑は、土器廃棄坑である。

【439 土坑】(第 26 図、図版 14・15・21)

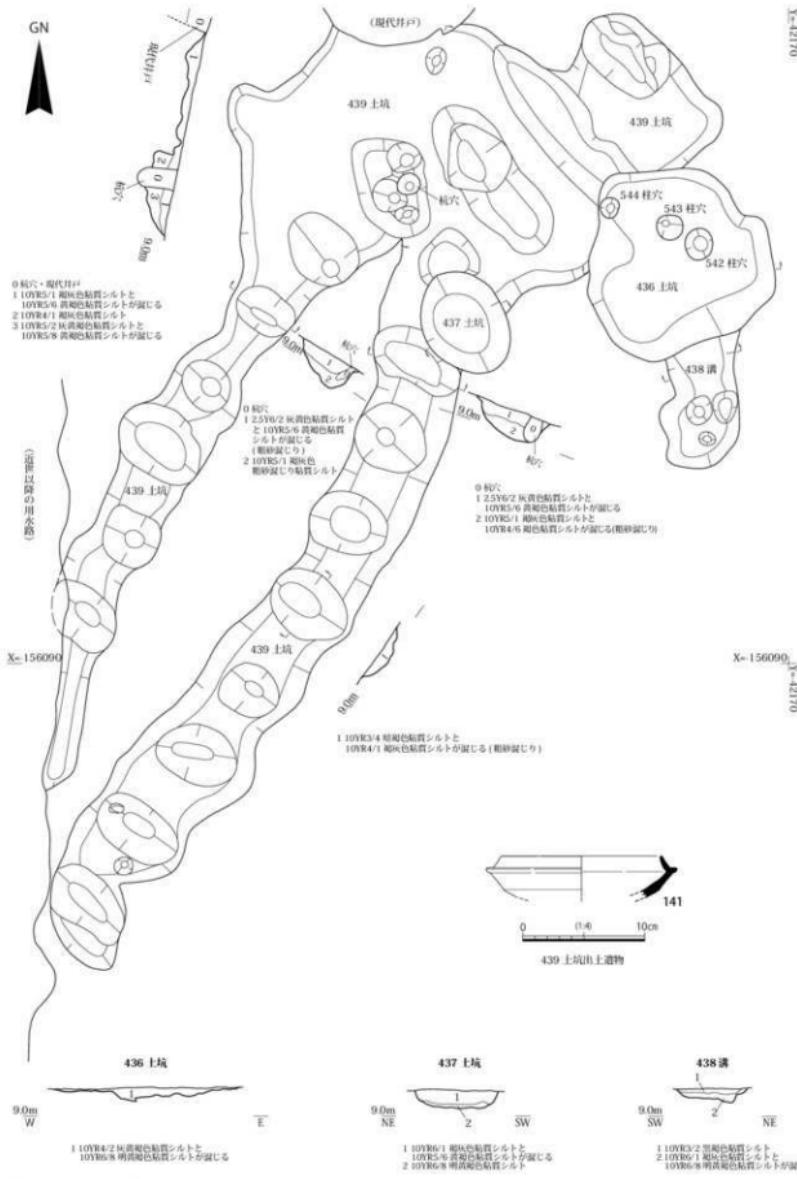
b 区南半で検出した特異な土坑である。北東端を同じくする北東～南西方向の二条の溝状の土坑で、その内部にさらに小土坑を連続的に設けるものである。小土坑は 19 基を数える。溝状部分は、幅 40 ～ 90 cm で、深さは 10 cm 程度である。内部の小土坑は、概ね 楕円形状を呈し、長軸は 50 ～ 80 cm、短軸は 50 cm 程度である。深さは溝状部分の底面からは 20 cm ほどである。出土遺物はほとんどなく土師器、須恵器杯、黒色土器 A 類の小片のみである。第 26 図 141 に須恵器杯を図示しておく。6 世紀後半のものと思われるが、遺構の時期を示すものかどうかは疑問である。

【534 土坑】(第 27 図、図版 15・22)

b 区南西端で検出した大土坑である。北西から南東方向に細長い形状で、北西端は、調査区外に伸びる。南東端部は、漏斗状に窄まり、深さも浅くなって終息する。規模は長軸 150 m、短軸 5.7 m である。断面形状は椀状



第 25 図 404 土坑 遺物出土状況 平・断面図 1 : 20 出土遺物図 1 : 4



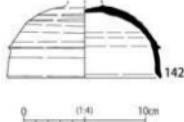
第26図 436・437・439土坑・438溝 平・断面図 1:40 439土坑 出土遺物図 1:6

434上坑



- 1 10YR5/2 坎黄褐色粘质シルトと10YR5/6 黄褐色粘质シルトが混じる
- 2 10YR5/6 黄褐色粘质シルト
- 3 2.5YR4/1 坎褐色粘质シルト
- 4 10YR6/2 坎褐色粘质シルト
- 5 2.5YR5/1 坎褐色粘质シルト
- 6 10YR6/6 坎褐色粘质シルト
- 7 10YR6/3 坎褐色粘质シルト

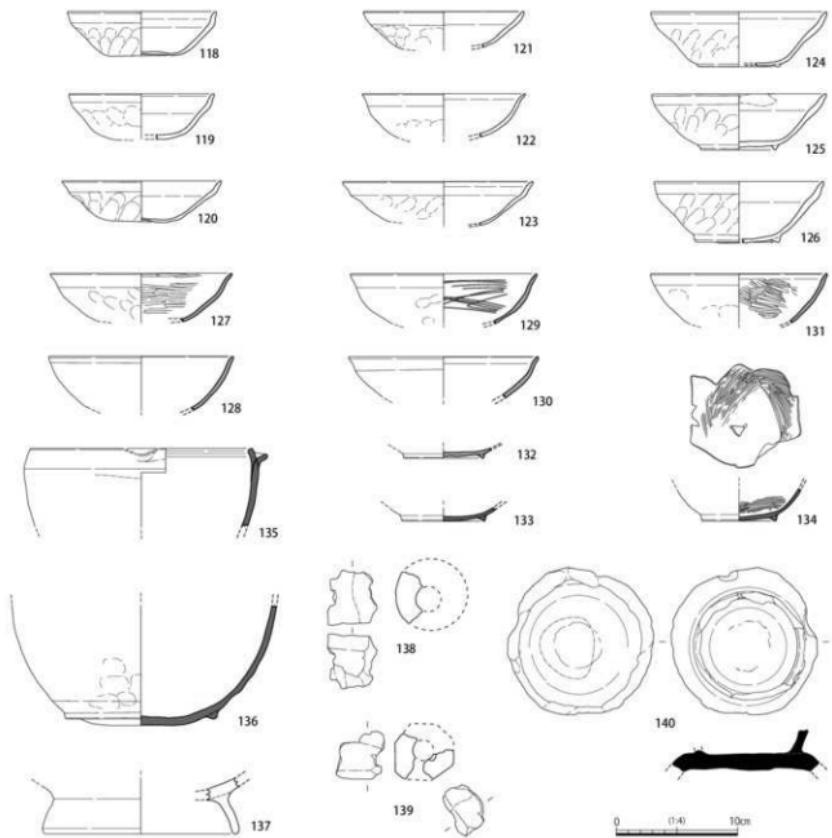
534上坑



0 (1m) 1m

- 1 10YR4/2 从黄褐色粘质シルト
- 2 7.5YR5/1 坎褐色粘质シルト
- 3 2.5YR4/1 坎褐色粘质シルトと10YR4/6 坎褐色粘质シルトが混じる
- 4 7.5YR5/1 坎褐色粘质シルト
- 5 10YR5/1 坎褐色粘质シルトと10YR6/6 坎褐色粘质シルトが混じる
- 6 10YR5/6 坎褐色粘质シルト
- 7 10YR6/6 坎褐色粘质シルト
- 8 10YR4/1 坎褐色粘质シルト

第27図 434・534 土坑 断面図 1:40 534 土坑 出土遺物図 1:4



第28図 434 土坑 出土遺物図 1:4

を呈し、深さは50cmである。

出土遺物は、わずかに土師器小片が見られるほか、第27図142に示す須恵器杯蓋の完形が出土している。須恵器編年の中村編年I型式5段階のもので、5世紀末頃の所産と思われる。遺構の性格としては貯水施設と考えられる。本遺構北端には直行するように539溝が取り付く、南端には540溝が取り付く。取排水に伴うものと思われる。

(5) 小溝群

(第29・30図、図版15・22)

今回の調査区のはば全域において、南北方向、東西方向の溝を検出した。その数は、総数で166条になる。これらは、おおよそ幅20~30cm、深さ10~20cmのもので、規模が小さな溝であるため“小溝”とされる。小溝は一般に、畑耕作や水田耕作に伴う溝とされ、一条の溝が単独で機能するものではなく、複数の溝が、規則性をもって配列し、小溝群として存在するものである。

なお今回の調査では、幅80~90cmのものも群として認識できるものは小溝群とした。はば調査区全域に広がる小溝群ではあるが、小溝の規模、方向、配列状況を検討した結果、A~Fの5類型に分類できるようである。なおこの分類に付したA~Fの順位には時代的要素は含まれないものとし、時代性については別途検討することとしたい。

[小溝群A]

北東~南西方向のものである。223溝と平行し、同溝の近辺、周辺に分布する。223溝との有機的関連性が考えられる。条里地割がよく遺存する調査区周辺地域において、東西・南北の方向性に従わない小溝群の存在は注目される。

[小溝群B]

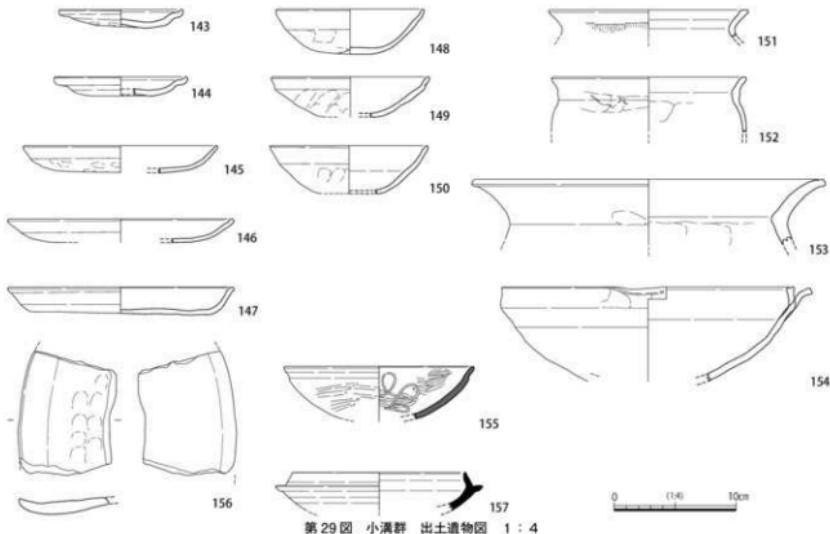
調査区東半に分布する。幅80~90cmで、小溝としてはやや大型の南北溝によって構成される。これらは南北方向を意識してはいるが、それぞれの小溝の北端は北西~南東方向に線を引いたように終端しており、独自の地割区画があるよう思える。また南端も432溝により規制されており、これも正東西方向でもなく北端ラインとも平行ではない。なお小溝群Cとの重複関係においては小溝群Bのほうが古く、また223溝との重複関係においては小溝群Bの方が新しい。

[小溝群C]

調査区のはば全面に広がるもので、ほぼ南北・東西方向に沿うものである。軸になる南北方向の小溝とそれに直交し、等間隔に平行する小溝との組み合わせで、小溝群Bとの重複関係においては、小溝群Bよりも新しい。また434土坑との重複関係では、小溝群Cの方が古く、a区中央柱穴群との関係では、小溝群Cの方が古い。

[小溝群D]

南北方向の小溝群であるが、正方位よりやや西にその



第29図 小溝群 出土遺物図 1:4

軸を振る。調査区の南東半を中心に分布する。遺構の重複関係では、小溝群C・Eよりも新しく、482・435・436土坑よりも古い。

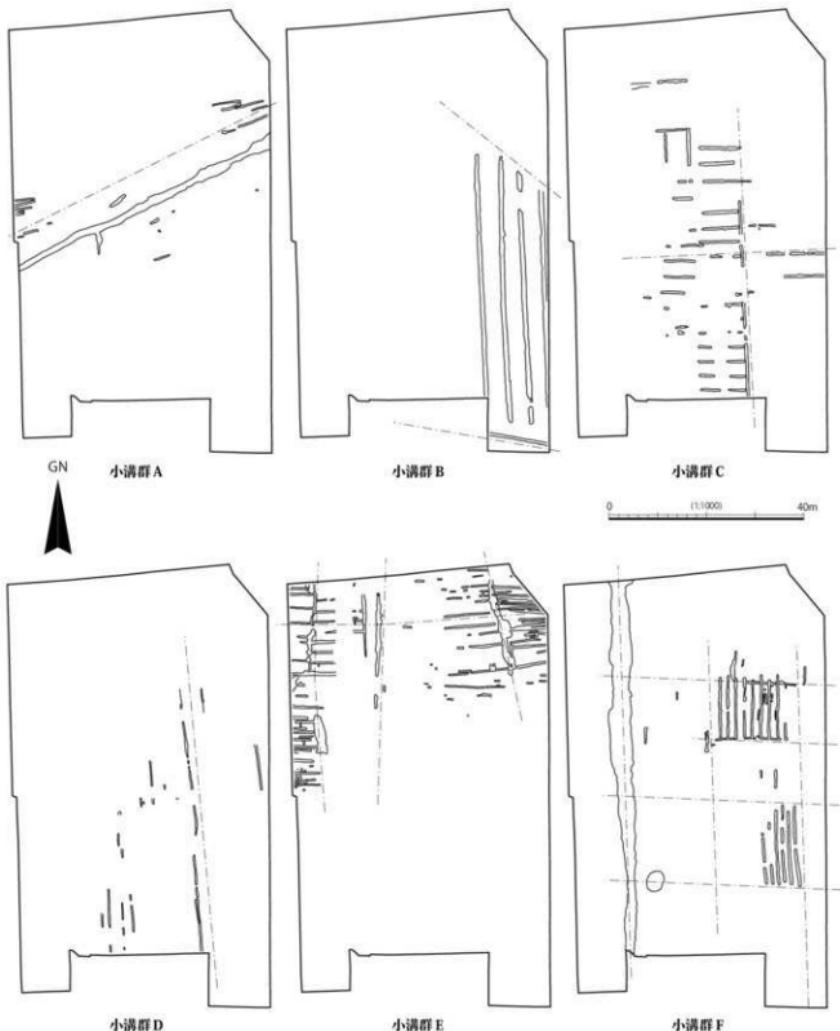
【小溝群E】

a区北半部を中心に分布するもので、軸になる南北方向の溝と平行する多数の東西方向の小溝によって構成さ

れる。小溝群E西半のものと東半のものとが若干、形様が異なるため、さらに細分できるものかもしれない。遺構の重複関係においては、小溝群A、据立柱建物1A・1Bよりも新しく、小溝群Dよりも古い。

【小溝群F】

東西・南北方向を意識した小溝群であり、そのまとま



第30図 小溝群分類模式図 1:1000

りから耕作区画を推察させる一群である。各小溝埋土が近世以降の用水路の上層埋土と類似しており、同時期で当該用水路とも有機的に関連付けされるものであろう。

【出土遺物】(第29図)

小溝群Aからは、土師器皿・壺、須恵器杯・瓦器椀、平瓦、小溝群Bからは、土師器椀・壺、須恵器杯・瓶子・壺、黒色土器A類、弥生土器甕又は壺、小溝群Cからは、土師器椀・皿・壺・甕、須恵器蓋・瓶子・壺、綠釉陶器椀、古代平瓦、黒色土器A類椀、小溝群Dからは、土師器椀・皿・羽釜・壺、須恵器甕、黒色土器A類椀、小溝群Eからは、土師器椀・皿・小皿・蓋・高杯・片口鉢・羽釜・壺・甕、須恵器蓋・壺・瓶子・壺、黒色土器A類、黒色

土器B類椀・瓦器椀、平瓦・丸瓦・製塙土器、小溝群Fからは、土師器椀・台付鉢・羽釜、瓦器椀、須恵器平瓶・壺・甕が出土している。図化できたものは第29図に示す。小溝群Bから出土したものは、151土師器甕、157須恵器杯である。小溝群Cからは、148土師器椀である。小溝群Eからは、143・144土師器小皿、145～147土師器皿、149・150土師器椀、152・153土師器甕、154土師器鉢、155瓦器椀、156土師器甕である。遺構の性格上、新旧遺物の混在を否めず、時期判断資料としては、広く概観するのみである。

5 結 語

【掘立柱建物について】(第31図)

今回の調査において確認した遺構のうち掘立柱建物について整理しておきたい。掘立柱建物は、今回、復元可能なものとして10棟を検出した。それらはそれぞれの建物の方向や重複関係から、掘立柱建物群A～Eの5類に分類にすることが可能である。なおこの分類に付したA～Eの順位には時代的要素は含まないものとし、時代性については別途検討することとした。また建物の方向については、一律に比較するために南北棟建物では棟方向、東西棟建物では梁方向を基準として比較した。

【掘立柱建物群A】

掘立柱建物1A・1B・2Aにより構成される建物群である。a区北半に分布する。建物方向は、座標北に対して西に $0^{\circ} 59'$ ～ $1^{\circ} 3'$ 振り。構成する柱穴は、大型で隅丸方形状に近いものである。建物1A・1Bの北辺の東西ラインと2A南辺の東西ラインがほぼ合致し、規格性が認められる。建物1Bは、建物1Aを絶壁替した建物であるが、建物1Aと建物2A、建物1Bと建物2A、建物1A・1Bと建物2Aといった組み合わせ共存関係については不明である。遺構の重複関係から掘立柱建物群Bおよび小溝群Eよりも古い。

【掘立柱建物群B】

掘立柱建物2B・3・4A・10により構成される建物群である。a区中央から南半に分布する。建物方向は、座標北に対して西に $3^{\circ} 24'$ ～ $3^{\circ} 50'$ 振り、構成する柱穴は、大型で隅丸方形状に近いものである。建物2Bの西辺南北ラインと建物3の東辺南北ライン、建物2Bの東辺南北ラインと建物10の東辺南北ラインが合致し、規格性が窺える。建物2Aと建物2Bとの重複関係から掘

立柱建物群Aよりも新しい位置づけである。また小溝群Eよりも古い。

【掘立柱建物群C】

掘立柱建物4B・8・9により構成される建物群である。a区南半～b区中央に分布する。建物方向は、座標北に対して西に $5^{\circ} 32'$ ～ $5^{\circ} 53'$ 振り、構成する柱穴は、円形状の小型柱穴が多い。遺構の重複関係から小溝群Cよりも新しい。また掘立柱建物の復元はできなかったが、その可能性としてあげたa区中央柱穴群のいくつかの柱穴は小溝群Cよりも新しく、ここに掘立柱建物を復元できれば掘立柱建物群Cに含まれる可能性が考えられる。また位置関係や出土遺物の様相から433井戸、434土坑と併存する可能性が高い。また435・436・437・473・482土坑は、その位置的関係から434土坑と関連性があると思われる所以、これらも併存する遺構であると考えておく。

【掘立柱建物群D】

掘立柱建物6・7によって構成される建物群である。b区南半に分布する。建物方向は、座標北に対して東に $1^{\circ} 26'$ ～ $1^{\circ} 45'$ 振り、構成する柱穴は、円形状の小型柱穴である。遺構の重複関係から434土坑、小溝群Cよりも新しい。

【掘立柱建物群E】

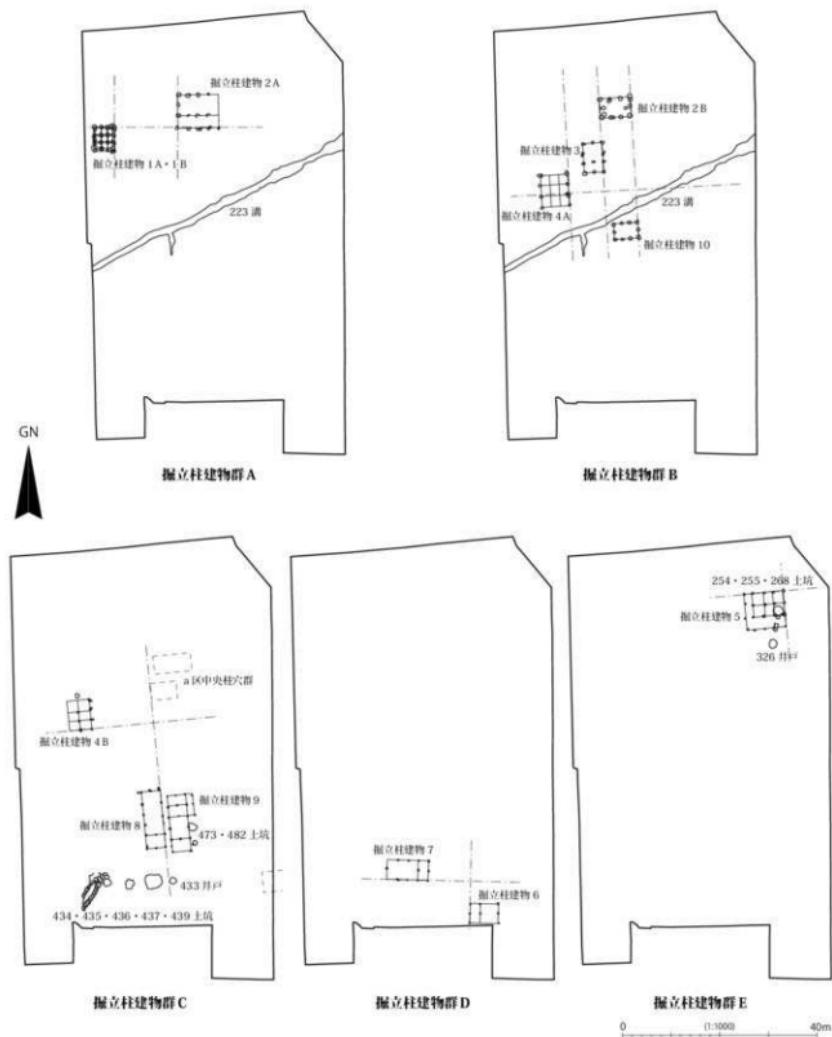
構成建物は、a区北東部に位置する掘立柱建物5一棟である。建物方向は、座標北に対して西に $5^{\circ} 53'$ 振り。出土遺物から326井戸、254・255・268土坑と併存するものと思われ、一棟の居住空間を復元できるものと考える。

【総括】

今回の調査において確認した遺構について、掘立柱建物類型、小溝群類型、遺構相互の重複関係と関連性、出土遺物等を鑑み、歴年総括してみたい。

池内遺跡の東縁で、同一地形・立地である三宅西遺跡

では縄文時代後期の土器群が出土しているが、今回の調査では、縄文時代の遺構・遺物は確認することはできなかった。今回の調査成果で時代的に最も古いものは、404 土坑 1 基で、弥生時代前期～中期と比定できる。池内遺跡では、今回の調査区の西方で、弥生時代前期の集



第31図 掘立柱建物群分類模式図 1:1000

落と水田跡が確認されており、集落を形成する居住域と生産域があきらかとなっている。今回、土塙墓の可能性をもつ遺構が確認されたことで、もうひとつの集落構成である墓域を明らかにできる可能性を見たものである。弥生時代中期～後期、古墳時代初期といった時期の遺構・遺物は見当たらず、古墳時代では、5世紀末頃に比定できる534土坑を確認したのみである。貯水施設と考えられる大土坑である。この時期に続く6世紀代の遺物も今回の調査では散見できるものの遺構は確認されず様相は不明である。また円筒埴輪の出土が極わずかにみられたが、地形立地上、調査地周辺に古墳が存在したとは考えにくい。しかしながら少し離れた三宅遺跡や大和川今池遺跡といった段丘上の遺跡では古墳が存在していたことが知られ、近年では、大和川今池遺跡の発掘調査で方墳跡も検出された。円筒埴輪は、おそらくそういったところから運ばれてきたものではないかと思われる。飛鳥・奈良時代の遺構は、今回は見当たらないが、参考文献2による東隣の発掘調査区において、河内国分寺式と思われる奈良時代の蓮華文軒丸が出土していることは注目されるものである。

平安時代前期では、掘立柱建物群A・B、223溝が9世紀中頃と比定できる。掘立柱建物群ではAがBよりも先行するが、柱穴配置に共通する箇所が見られることから時期差は隔絶するものではないと考える。建物構成を見ると1A・1Bは倉庫建築で、4Aも不確実ながら倉庫建築の可能性がある。掘立柱建物群Aでは、建物2Aを主屋、建物1A・1Bを倉とし、掘立柱建物群Bでは、建物2Bを主屋、建物3・10を副屋、4Aを倉とする建物配置を想定できる。またこれらは正方位で規格性をもっており、主屋と倉を配置する形態は、いわゆる官衙風建物配置ということができるだろう。223溝については、遺物からは、掘立柱建物群AまたはBあるいはその両方と併存していたと思えるが、建物群Bでは建物配置内を横断することになるので、建物群Aから建物群Bへ移行する際に埋設されたと考えるのが妥当であろう。溝埋土は、下層に砂層があつて水流があったことが窺われるが、上層に泥土堆積がなく、よく管理された溝が一挙に埋設された状況といえる。また遺物の出土状況も埋設時に廃棄処理されたものと考えられるのでその仮定も十分に考えられるものである。小溝群Aは223溝と方向を同じくする小溝群で223溝と同時期と考える。当該小溝群の分布は限定的で掘立柱建物群A・Bの域外東方・西方にわずかに分布するのみである。建物域外では併存して小規模な耕作が行われていたものと思われる。なお223溝および小溝群Aの正方位に対して斜行する方向

は、調査地の周辺微地形が南西から北東に向かって傾斜していることに起因するものである。小溝群Bは223溝の埋設後に現れるものであるが、その範囲が掘立柱建物群B域に及ばず、建物群Bと併存していた可能性が考えられる。また小溝群Bは小溝幅・小溝間隔とも他の小溝群とは異なり広く、一般に言う耕作溝とは異なった用途のものであるのかもしれない。

小溝群Bのあとに小溝群Cが出現する。分布状況からみて掘立柱建物群Bが廃絶したあと耕地化したと思われる。注目されるのは、当該小溝群が正方位に則ることである。今回の調査区において条里地割と方向性を同じくする小溝群の初現である。時期は明言しがたいが、次に明らかになる遺構の時期との関連で言えば、10世紀代であることは言えようである。小溝群Cに次いで現れるのが掘立柱建物群Cである。出土遺物の様相から10世紀後半～10世紀末頃と思われる。特徴的なことは掘立柱建物8・9に見られる長形の建物である。加えて434土坑からは籠羽口の出土も見ており、何らかの金属加工をおこなっていたのではないかと思われる。とすれば特異な土坑である439土坑は、粘土採掘坑であった可能性が考えられる。掘立柱建物群Cの廃絶後に26溝が現れる。26溝は地形に沿った溝で、わずかに蛇行する。耕作用の溝ではなく自然流路的であることから掘立柱建物群Cの廃絶後、調査地周辺は一時期、荒蕪地化したものと思われる。その後に小溝群Eが出現し、再び耕地化されたことがわかる。小溝群Eはその後、小溝群Dへ耕地変更されている。時期的には平安時代後期の範疇であろう。小溝群Dが広がる耕地に再び掘立柱建物が建築されて居住区となる。掘立柱建物群Dである。時期的には平安時代後期と考える。12世紀後半、平安時代末期～鎌倉時代初頭に至り井戸を伴った建物が建築される。掘立柱建物群E＝掘立柱建物5である。当時の居住空間を知る資料となるものである。掘立柱建物群Eが廃絶後は、耕地を改変しつつ現代まで耕地利用が続く。小溝群Fは近世の耕作に伴うものである。

以上、調査成果についてまとめたが、特に平安時代前期の官衙風建物群について、その性格などの検討が、今後さらに進展することを期待するものである。

表5 本文掲載以外の構造一覧表(1)

※計測値の()は残存値または推定値

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋 土	摘要・出土遺物など
003 潜 (224)	121	10	17.5YR3/2 黒褐色粘質シルト		出土遺物なし
004 上坑	86	51	22	110YR4/3 に赤い黄褐色粗砂混じり粘質シルト 210YR4/1 黒褐色粘質シルト 310YR2/2 黑褐色粘質シルト	溝底岸
005 潜 (116)	71	9	110YR4/2 黄褐色粘質シルト		出土遺物なし
006 潜	128	43	17	110YR2/3 黑褐色粘質シルト 210YR6/8 明黄色粘質シルト	自然成因の溝
007 杖穴	36	27	16	110YR3/4 赤褐色粘質シルト 210YR5/6 黄褐色粘質シルト 310YR4/2 黄褐色粘質シルト 410YR5/4 に赤い黄褐色粘質シルトと10YR4/3 に赤い黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
008 杖穴	28	23	21	110YR3/4 黑褐色粘質シルト 210YR4/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
009 杖穴	23	21	4	12.5YS/2 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
010 杖穴	18	17	4	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
011 杖穴	24	22	4	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
012 杖穴	21	18	6	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
013 杖穴	27	(18)	6	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
014 杖穴	41	32	4	17.5YR4/2 黑褐色粘質シルト 210YR5/3 に赤い黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
015 杖穴	49	43	17	110YR6/1 黑褐色粘質シルト 210YR5/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
016 上坑 (102)	(75)	9	110YR5/8 黄褐色粘質シルト 210YR4/2 黑褐色粗砂 310YR3/1 黑褐色細砂～粗砂	自然成因の土坑	
018 杖穴	41	38	8	17.5YR4/1 黄褐色粘質シルト 2.75YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
019 杖穴	26	(21)	2	110YR4/1 黄褐色粗砂混じり粘質シルト 210YR4/3 に赤い黄褐色粗砂混じり粘質シルト	出土遺物なし
020 杖穴	44	38	15	110YR5/1 黄褐色粗砂混じり粘質シルト 210YR3/3 黄褐色粗砂混じり粘質シルト	出土遺物なし
021 杖穴	29	29	2	110YR5/1 黄褐色粗砂混じり粘質シルト 210YR3/3 黄褐色粗砂混じり粘質シルト	出土遺物なし
022 杖穴	41	35	4	110YR4/1 黄褐色粗砂混じり粘質シルト 210YR4/3 に赤い黄褐色粗砂混じり粘質シルト	出土遺物なし
023 杖穴	29	28	4	110YR4/1 黄褐色粗砂混じり粘質シルト 210YR4/3 に赤い黄褐色粗砂混じり粘質シルト	出土遺物なし
024 杖穴	30	24	10	110YR4/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
027 杖穴	34	26	16	17.5YR5/1 黄褐色粗砂混じり粘質シルト 210YR4/2 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
028 上坑	124	71	26	110YR3/2 黑褐色粘質シルト 210YR4/2 黄褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄色粘質シルトが混じる 310YR5/1 黄褐色粘質シルトと10YR6/6 明黄色粘質シルトが混じる	自然成因の土坑 上層部(約) 黑色土部(A類)
029 杖穴	21	20	11	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
030 杖穴	32	30	2	110YR3/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
033 杖穴	41	40	9	110YR5/6 黄褐色粘質シルトと10YR5/1 黄褐色粘質シルトが混じる 210YR5/6 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
036 杖穴	20	20	9	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
045 杖穴	30	28	17	110YR5/6 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
058 杖穴	16	13	6	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
064 杖穴	24	21	9	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	黒色土部(A類)
065 杖穴	31	22	5	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
066 杖穴	18	15	5	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
067 杖穴	21	15	3	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
068 杖穴	25	21	10	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
069 杖穴	15	13	4	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
070 杖穴	19	17	4	12.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
071 潜 (520)	47	10	110YR4/1 黄褐色粘質シルト	上層部(岩棒不明) 平瓦	
072 杖穴	38	35	10	110YR4/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
073 杖穴	28	25	10	110YR3/1 黑褐色粘質シルト	平瓦
074 杖穴	37	25	6	110YR3/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
075 杖穴	41	36	11	110YR3/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
076 杖穴	33	29	20	110YR3/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
077 杖穴	21	(19)	7	110YR4/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
078 杖穴	26	23	6	110YR4/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
079 杖穴	19	(12)	5	110YR4/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
080 杖穴	30	26	4	110YR4/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
084 杖穴	37	35	8	110YR4/6 黄褐色粘質シルトと10YR4/1 黄褐色粘質シルトが混じる	上層部(約)
088 杖穴	44	38	14	110YR4/1 黄褐色粗砂混じり粘質シルト 210YR3/3 黄褐色粗砂混じり粘質シルト	出土遺物なし
089 杖穴	38	23	8	110YR4/1 黄褐色粗砂混じり粘質シルト 210YR3/4 黄褐色粗砂混じり粘質シルト	出土遺物なし
090 杖穴	41	34	8	110YR4/1 黄褐色粗砂混じり粘質シルト 210YR3/4 に赤い黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
093 杖穴	81	70	11	110YR3/2 黑褐色粘質シルト(崩壊) 210YR4/3 に赤い黄褐色粘質シルト(崩壊)	出土遺物なし
098 杖穴	47	45	21	110YR4/1 黄褐色粘質シルトと10YR5/8 黄褐色粘質シルトが混じる 210YR3/1 黑褐色粘質シルトと10YR5/8 黄褐色粘質シルトと10YR4/3 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
100 杖穴	39	35	16	110YR6/8 明黄色粘質シルトと2.5Y4/4 オリエー明黄色粘質シルトが混じる 210YR6/6 明黄色粘質シルトと2.5Y4/4 オリエー明黄色粘質シルトが混じる	上層部(岩棒不明)
101 杖穴	31	26	10	110YR6/6 明黄色粘質シルトと2.5Y4/4 オリエー明黄色粘質シルトが混じる	出土遺物なし

表6 本文掲載以外の遺構一覧表(2)

※計測値の()は残存値または推定値

遺構番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	理 土	摘要・出土遺物など
104 杖穴 57	53	22	1	10YR4/1 黒褐色粘質シルト 2 10YR4/4 黄褐色粘質シルトと10YR7/4 に赤い黄褐色が混じる	出土遺物なし
120 杖穴 45	40	35	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR5/1 黄褐色粘質シルトと10YR6/6 明黃褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
121 杖穴 26	20	22	1	10YR3/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
137 杖穴 30	25	12	1	10YR3/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
138 杖穴 30	27	12	1	2.5YSV1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
141 杖穴 30	21	16	1	2.5YS/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
143 杖穴 24	19	18	1	10YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
144 杖穴 27	(20)	16	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
149 杖穴 20	19	8	1	10YR3/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
157 潟 361	56	12	1	10YR5/4 に赤い黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
158 潟 265	51	14	1	10YR5/4 に赤い黄褐色粘質シルト 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト	土師器(種不明)
159 上坑 (239)	87	36	1	10YR3/2 黑褐色粘質シルト	自然成因の上坑 出土遺物なし
160 土坑 (571)	88	16	1	10YR7/6 明黃褐色粘質シルト 2 10YR4/4 黑褐色粘質シルトと10YR6/6 明黃褐色粘質シルトが混じる	自然成因の土坑 土師器(種)
161 土坑 252	97	23	1	10YR3/2 黑褐色粘質シルト	自然成因の土坑 出土遺物なし
168 杖穴 39	38	13	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR3/3 帆船形粘質シルト	出土遺物なし
177 杖穴 34	25	4	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
178 杖穴 22	20	10	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
179 杖穴 55	51	18	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
180 杖穴 34	26	14	1	2.5YSV1 黑褐色粘質シルト 2 10YR3/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
181 杖穴 20	19	7	1	10YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
182 杖穴 32	30	7	1	7.5YSV1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
183 杖穴 36	35	10	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR5/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
187 杖穴 29	23	10	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR5/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
188 杖穴 29	(17)	14	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルトと10YR4/1 黄褐色粘質シルトが混じる(田砂混じり)	出土遺物なし
189 上坑 77	74	42	1	10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR6/6 明黃褐色粘質シルト 3 10YR3/2 黑褐色粘質シルト	土師器(杯)
190 杖穴 45	37	12	1	10YR3/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR4/4 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
191 杖穴 35	30	8	1	10YR3/3 帆船形粘質シルト 2 10YR4/1 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
192 杖穴 33	30	18	1	10YR3/4 黑褐色粘質シルト 2 10YR4/4 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
207 杖穴 42	36	10	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR4/3 に赤い黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
221A 潟 (381)	102	22	1	10YR3/4 黑褐色粘質シルト 2 10YR4/1 黄褐色粘質シルト	土師器(皿, 豪)、須恵器(鏡)
221B 潟 (342)	122	10	1	10YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
221C 潟 (233)	95	15	1	10YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
221D 潟 (372)	71	10	1	10YR3/2 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
222 潟 (330)	75	21	1	10YR2/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
224 土坑 145	69	18	1	7.5YSV1/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR5/2 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
228 土坑 61	50	38	1	10YR2/1 黑褐色粘質シルト 2 10YR5/6 黄褐色粘質シルト	自然成因の土坑(櫛標痕?) 出土遺物なし
232 潟 129	42	6	1	10YR5/2 黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
242 土坑 (63)	57	8	1	10YR2/1 黑褐色粘質シルト	自然成因の土坑 出土遺物なし
243 土坑 (101)	(76)	12	1	10YR3/4 黑褐色粘質シルト	自然成因の土坑 出土遺物なし
244 土坑 58	54	6	1	10YR3/4 黑褐色粘質シルト	自然成因の土坑 出土遺物なし
245 土坑 251	84	17	1	10YR3/2 黑褐色粘質シルト 2 10YR5/6 黄褐色粘質シルトと10YR5/1 黄褐色粘質シルトが混じる 3 10YR4/1 黑褐色砂	自然成因の土坑 出土遺物なし
246 土坑 224	90	28	1	10YR2/2 黑褐色粘質シルト 2 10YR5/1 黄褐色粘質シルトと10YR4/1 黄褐色粘質シルトが混じる 3 10YR4/1 黑褐色砂	自然成因の土坑 土師器(種不明)
247 土坑 90	59	5	1	10YR2/1 黑褐色粘質シルト	自然成因の土坑 出土遺物なし
256 土坑 118	100	22	1	10YR2/4 黑褐色粘質シルトと10YR5/8 黄褐色粘質シルトと10YR4/1 黑褐色粘質シルトが混じる 2 10YR4/4 黄褐色粘質シルト 3 10YR5/4 に赤い黄褐色粘質シルト	自然成因の土坑 出土遺物なし
261 土坑 172	56	18	1	10YR3/3 に赤い黄褐色粘質シルト 2 10YR4/3 に赤い黄褐色粘質シルト 3 10YR4/2 黑褐色粘質シルト 4 10YR5/4 に赤い黄褐色粘質シルト	自然成因の土坑 出土遺物なし
263 杖穴 55	41	13	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルトと10YR3/2 黑褐色粘質シルトが混じる(田砂混じり) 2 10YR4/1 黑褐色砂	出土遺物なし
264 杖穴 41	36	11	1	10YR4/1 黑褐色粘質シルトと10YR4/3 に赤い黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR5/1 黄褐色砂	出土遺物なし

表7 本文掲載以外の構造一覧表(3)

※計測値の()は残存値または推定値

遺構番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	埋 土	摘要・出土遺物など
265 杖穴 40	36	18	110YR3/1 黒褐色粘質シルトと10YR4/1 順灰色粗砂が混じる	2 10YR4/1 順灰色粗砂	出土遺物なし
268 土坑 67	55	9	110YR4/1 順灰色粗砂混じり粘質シルト		出土遺物なし
269 杖穴 18	16	6	110YR5/6 黄褐色粘質シルトと10YR4/6 黄褐色粘質シルトが混じる		出土遺物なし
320 土坑 263	131	18	110YR3/1 黑褐色粘質シルト	2 10YR5/2 灰黄褐色粗砂	自然成因の土坑 出土遺物なし
321 潟 228	67	11	110YR3/4 褐褐色粘質シルト	2 10YR4/2 黄褐色粘質シルト	自然成因の溝 出土遺物なし
322 土坑 (717)	74	13	110YR5/2 灰黄褐色粗砂混じり粘質シルト	2 10YR3/2 黑褐色粗砂混じり粘質シルト	自然成因の土坑 出土遺物なし
324 土坑 (161)	(69)	16	110YR3/2 黑褐色粘質シルト	2 10YR6/6 明黄褐色粘質シルトと10YR4/2 黄褐色粘質シルトが混じる	整地地盤か? 上層器(明)須恵器(蓋)黑色土器(A類器種不明)、平瓦
325 潟 (432)	71	24	110YR3/1 黑褐色粘質シルト		自然成因の溝 出土遺物なし
328 土坑 (100)	(47)	9	110YR2/2 黑褐色粘質シルト		出土遺物なし
340 土坑 144	100	14	110YR6/1 順灰色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粗砂が混じる		近世耕作土坑 須恵器(杯)瓦器(陶)
343 杖穴 24	23	12	110YR5/1 順灰色粘質シルト		上層器(明)黑色土器(B類器)
389 潟 (131)	(45)	20	110YR4/2 黄褐色粘質シルト	2 10YR5/4 に付い黄褐色粘質シルトと10YR3/2 黑褐色粘質シルトが混じる(粗砂混じり)	自然成因の土坑 上層器(種不明)
398 杖穴 21	20	10	110YR4/1 黑褐色粘質シルト		出土遺物なし
399 潟 199	49	8	110YR2/2 黑褐色粘質シルト		自然成因の溝 出土遺物なし
400 杖穴 32	27	10	110YR4/2 黄褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	2 10YR3/2 黑褐色粘質シルトと10YR5/4 に付い黄褐色粘質シルトが混じる(粗砂混じり)	出土遺物なし
401 杖穴 17	16	8	110YR3/4 褐褐色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる		出土遺物なし
			110YR4/1 黑褐色粘質シルトと10YR7/1 順白色粘質シルトと10YR4/4 黄褐色粘質シルトが混じる		
402 杖穴 41	31	20	2 10YR4/1 順灰色粗砂と10YR4/6 黄褐色粘質シルトが混じる	3 10YR3/1 黑褐色粘質シルト	出土遺物なし
			5 10YR3/1 黑褐色粘質シルトと10YR4/6 黄褐色粘質シルトが混じる		
403 土坑 92	55	8	110YR5/1 黑褐色粘質混じり粘質シルト		出土遺物なし
414 杖穴 29	29	16	110YR4/1 順灰色粘質シルト		出土遺物なし
415 土坑 137	96	13	1 2.5Y6/1 黄灰色粘質シルト(10YR6/6 明黄褐色粘質シルトブロック混じる)		近世耕作土坑 出土遺物なし
416 杖穴 35	30	17	110YR5/1 順灰色粘質シルト	2 10YR4/1 順灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
417 杖穴 36	33	23	110YR5/1 順灰色粘質シルト	2 10YR4/1 順灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
418 杖穴 32	29	30	110YR4/1 順灰色粘質シルト	2 10YR4/1 順灰色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
419 杖穴 53	39	14	110YR4/1 順灰色粘質シルトと10YR5/4 に付い黄褐色粘質シルトと10YR2/2 黑褐色粘質シルトが混じる	2 10YR5/1 黑褐色粘質シルトと10YR4/2 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
420 杖穴 59	54	22	110YR5/1 順灰色粘質シルトと10YR3/1 黑褐色粘質シルトが混じる	2 10YR5/1 順灰色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
424 土坑 135	55	8	110YR5/1 順灰色粘質シルトと10YR5/6 黄褐色粘質シルトが混じる		出土遺物なし
425 土坑 65	(53)	7	110YR3/2 黑褐色粘質シルトと10YR6/4 に付い黄褐色粘質シルトが混じる	2 10YR6/4 に付い黄褐色粘質シルト	自然成因の土坑 出土遺物なし
426 土坑 72	52	6	110YR3/2 黑褐色粘質シルト		自然成因の土坑 出土遺物なし
427 土坑 (48)	35	10	110YR3/2 黑褐色粘質シルト		自然成因の土坑 出土遺物なし
428 土坑 51	35	7	110YR6/2 黄褐色粘質シルト(マンガニ鉱含む)		出土遺物なし
429 潟 (334)	22	8	110YR5/3 に付い黄褐色粘質シルト		出土遺物なし
430 土坑 126	76	7	110YR3/2 黑褐色粘質シルトと10YR6/4 に付い黄褐色粘質シルトが混じる		自然成因の土坑 出土遺物なし
431 土坑 81	(68)	15	110YR2/2 黑褐色粘質シルト		自然成因の土坑 出土遺物なし
435 土坑 183	180	31	110YR5/1 順灰色粘質シルトと10YR6/8 明黄褐色粘質シルトが混じる		上層器(焼)須恵器(蓋) 黑色土器(B類器)
441 土坑 47	45	8	110YR6/1 順灰色粘質シルトと10YR6/6 明黄褐色粘質シルトと10YR4/4 黄褐色粘質シルトが混じる		出土遺物なし
442 土坑 (108)	66	7	110YR3/2 黑褐色粘質シルト	2 10YR5/4 に付い黄褐色粘質混じり粘質シルト	溝底層 出土遺物なし
443 杖穴 32	28	9	110YR5/1 順灰色粘質シルトと10YR4/2 黄褐色粘質シルトが混じる	2 10YR6/1 順灰色粘質シルトと10YR5/2 黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし

表 8 本文掲載以外の遺構一覧表 (4)

*計測値の () は残存値または推定値

遺構番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	理 上	摘要・出土遺物など
447 柱穴 22	20	13	1	I 7.5YR3/2 黒褐色粘質シルトと 210YR6/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR7/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
450 柱穴 27	25	25	1	I 10YR6/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR6/8 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
453 柱穴 19	18	8	1	I 10YR5/1 鮎灰色粘質シルト	出土遺物なし
464 柱穴 23	19	7	1	I 10YR6/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR4/1 鮎灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
465 柱穴 26	25	20	1	I 10YR6/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR6/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR4/1 鮎灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
466 柱穴 29	26	11	1	I 10YR5/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR4/1 鮎灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
467 柱穴 25	23	16	1	I 10YR6/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR4/1 鮎灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
468 柱穴 27	24	19	1	I 10YR5/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR4/4 鮎色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
			2	2 10YR4/2 灰黃褐色粘質シルトと 3 10YR6/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR6/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
469 柱穴 25	23	25	1	I 10YR5/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR4/4 鮎色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
470 柱穴 23	21	20	1	I 10YR5/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR4/4 鮎色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
473 土坑 93	84	8	1	I 10YR7/1 白褐色粘質シルトと 10YR6/8 明黄褐色粘質シルトが混じる	土師器(碗, 壺)
482 土坑 195	143	11	1	I 7.5YR3/1 黒褐色粘質シルトと 10YR7/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
490 土坑 435	333	(81)	1	I 7.5GY6/1 鮎灰色粗砂と 5Y6/1 灰色粗砂, N6/0 灰色粘質シルト, 7.5YR6/8 粗色粗砂, SY6/1 灰色粘質シルト +, N5/0 灰色粘質シルト, 7.5Y5/1 灰色粗砂が混じる複数乱	耕作用井?又は水溜上坑
494 柱穴 97	33	12	1	I 10YR6/3 鮎褐色粘質シルトと 10YR6/1 鮎灰色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
496 土坑 36	32	19	1	I 10YR2/3 黒褐色粘質シルトと 2.7.5YR5/1 鮎褐色粘質シルト	自然成因の土坑(樹根窟?)
497 柱穴 23	21	3	1	I 10YR5/1 鮎灰色粘質シルトと 10YR7/6 明黄褐色粘質シルトが混じる 2 10YR7/6 明黄褐色粘質シルト	出土遺物なし
498 柱穴 24	24	9	1	I 10YR5/1 鮎灰色粗砂と 10YR6/2 灰黃褐色粗砂が混じる 2 10YR6/2 灰黃褐色粗砂	出土遺物なし
522 土坑 44	(43)	11	1	I 10YR5/4 にぶい 黑褐色粘質シルトと 10YR5/6 黄褐色粘質シルトと 10YR5/1 鮎褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
532 柱穴 32	32	9	1	I 10YR4/1 鮎褐色粘質シルトと 2 10YR5/2 灰褐色粘質シルト	出土遺物なし
535 土坑 76	66	13	1	I 10YR3/2 黒褐色粘質シルトと 10YR6/4 にぶい 黄褐色粘質シルトが混じる	自然成因の土坑
			2	2 10YR5/1 鮎褐色粘質シルトと 10YR7/6 明黄褐色粘質シルトが混じる	出土遺物なし
536 土坑 23	23	8	1	I 10YR5/2 灰黃褐色粘質シルト	自然成因の土坑(樹根窟?)
537 土坑 35	24	4	1	I 10YR3/4 鮎褐色粘質シルトと 2.5Y6/6 明黄褐色シルトが混じる	小溝浅溝
538 土坑 85	58	30	1	I 2.5Y6/6 明黄褐色粘質シルトと 7.5Y5/1 灰色粘質シルトが混じる 2 N4/0 灰色粘質シルト	土師器(器種不明)
539A 溝 180	39	5	1	SY7/1 灰白色シルト	出土遺物なし
539B 溝 191	45	11	1	I 10YR5/3 にぶい 黄褐色粘質シルトと 5Y6/1 灰色シルトが混じる	出土遺物なし
540 溝 126	25	6	1	I 10YR4/4 海色粘質シルト	出土遺物なし
541 土坑 57	50	7	1	I 10YR4/6 海色粘質シルトと 10YR5/1 鮎褐色粘質シルトが混じる	耕作上層の跡込み跡浅溝
			2		出土遺物なし

図 版

図版1 調査区全景オルソ写真（a b区合成）



図版2
掘立柱建物1A・
1B



検出状況（南から）



完掘状況（東から）



34 柱穴（北から）



31 柱穴柱根検出状況（北から）



32 柱穴礎板石出土状況（北から）

図版3
掘立柱建物2A・2B





完掘状況（南から）



135 柱穴（北から）



200 柱穴（東から）



198 柱穴（南から）



197 柱穴礎板石出土状況（北から）

図版5
掘立柱建物4A・4B



完掘状況（北から）



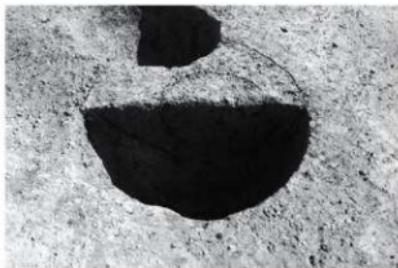
162 柱穴（西から）



156 柱穴（東から）



229 柱穴 硫板土器出土状況（西から）



175 柱穴（北から）



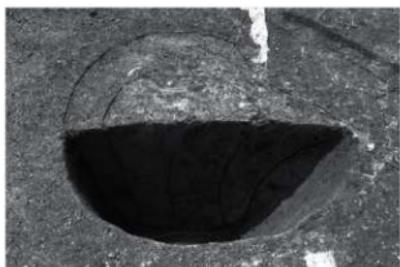
完掘状況（西から）



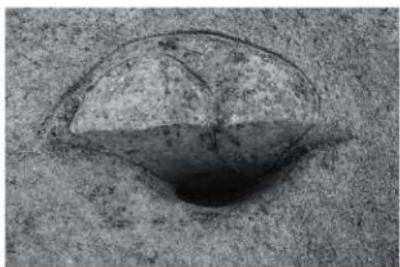
233 柱穴（北から）



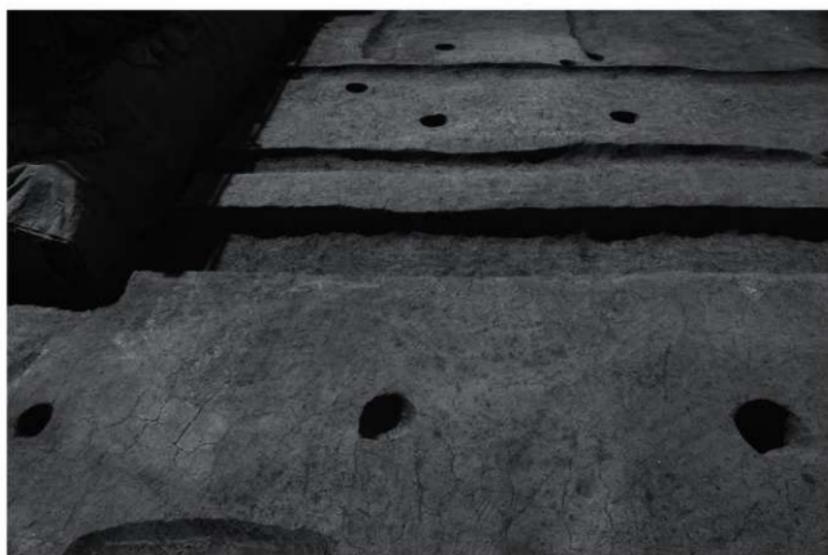
235 柱穴（北から）



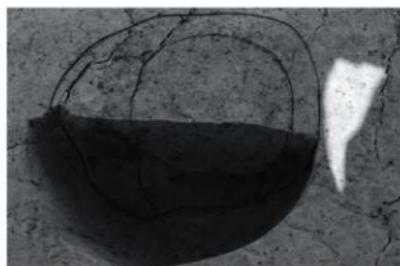
236 柱穴（北から）



237 柱穴（南から）



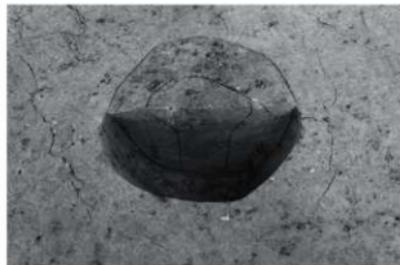
完掘状況（東から）



422 柱穴（西から）



448 柱穴（西から）



451 柱穴（西から）



452 柱穴（北から）

図版8
掘立柱建物7



完掘状況（北から）



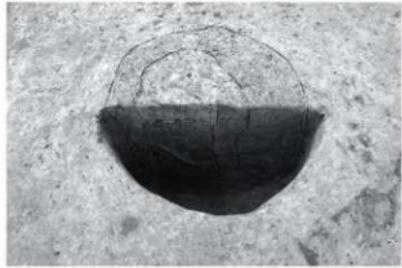
456 柱穴（北から）



457 柱穴（北から）



455 柱穴壁板等出土状況（北から）



463 柱穴（東から）



完施状況（北から）



479 柱穴（南から）



485 柱穴（南から）



489 柱穴（西から）



502 柱穴（南から）



完掘状況（北から）



474 柱穴（南から）



475 柱穴（南から）



515 柱穴（東から）



520 柱穴（東から）



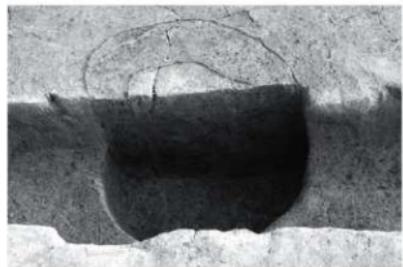
完掘状況（西から）



523 柱穴（南東から）



524 柱穴（北から）



525 柱穴（北から）



526 柱穴（西から）

図版
12
26
・
223
・
432
溝



26 溝（南西から）



26 溝断面（南西から）



223 溝（a区 南西から）



223 溝（b区 北東から）



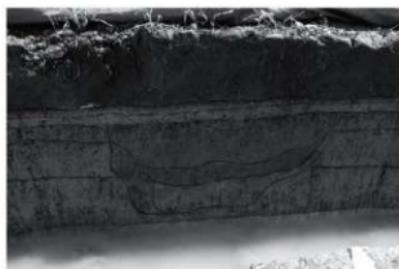
223 溝断面（北東から）



223 溝掘削坑先痕（北から）



432 溝（東から）



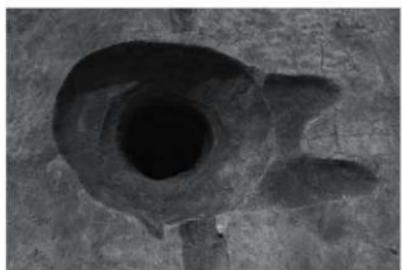
432 溝断面（西から）



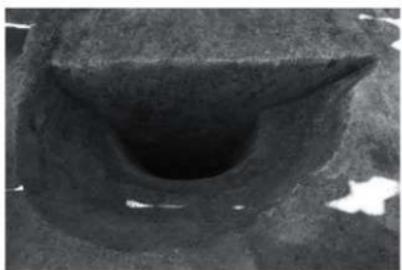
533 溝（北から）



533 溝断面（北から）



326 井戸（東から）



326 井戸断面（南から）



433 井戸（東から）



433 井戸断面（北から）



423 溝曲物井筒出土状況（南から）



254 土坑断面（南から）

533
溝
•
326
•
433
井戸
•
254
土坑

図版
14

255

267

404

434

439

土坑



255 土坑（南から）



267 土坑（南から）



404 土坑断面（北西から）



404 土坑断面（北東から）



404 土坑遺物出土状況（北東から）



404 土坑遺物出土状況（南東から）



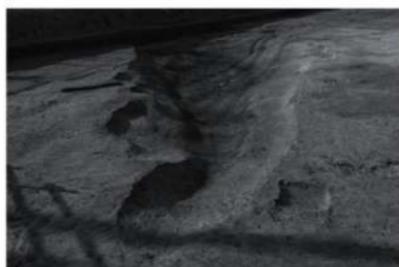
434 土坑（北から）



439 土坑（北東から）



439 土坑断面（西から）



534 土坑（南東から）



534 土坑断面（南東から）



534 土坑遺物出土状況（北西から）



小溝群（調査区北西部 南東から）



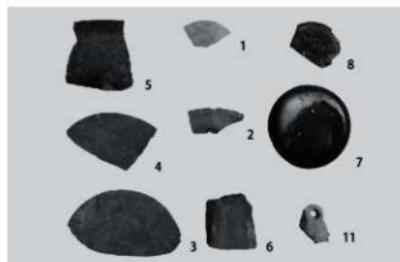
小溝群（調査区北東部 西から）



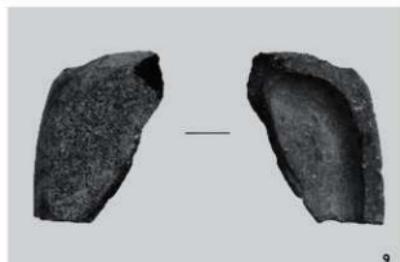
小溝群（調査区南東部 北西から）



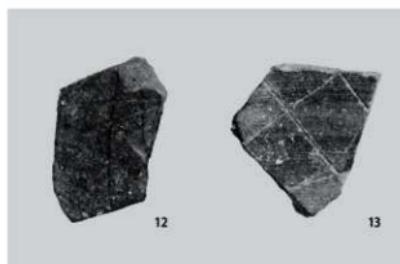
包含層土層の状況（西壁の一部）



包含層出土 土師器・須恵器・瓦器



包含層出土 須恵器風字硯



包含層出土 須恵器線刻土器



包含層出土 須恵器風字硯



包含層出土 滑石製湯石



包含層出土 凝灰岩切石

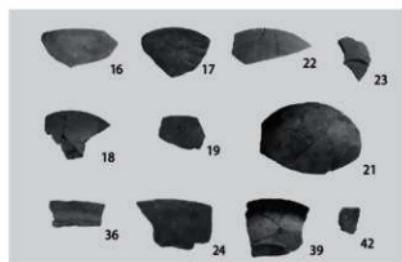


掘立柱建物 2B 出土 土師器皿

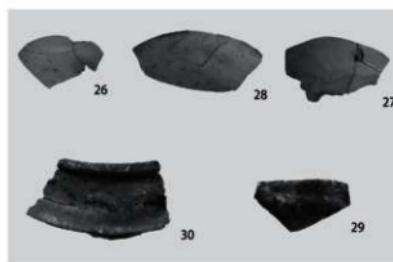


掘立柱建物 5 出土 土師器小皿

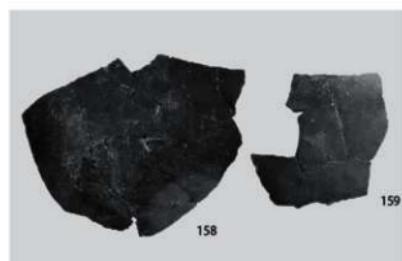
図版 17
掘立柱建物・a区中央柱穴群・223溝出土遺物



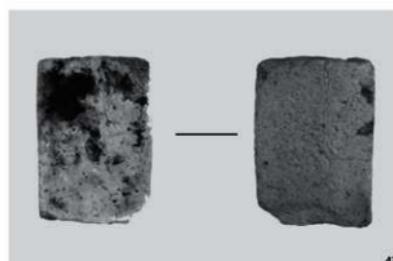
掘立柱建物 1A+1B+2A+2B+3+10・a区中央柱穴群出土
土師器・須恵器・黒色土器・製塙土器



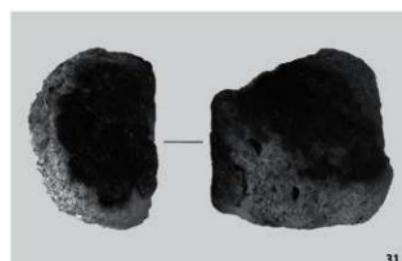
掘立柱建物 5 出土 土師器・瓦器



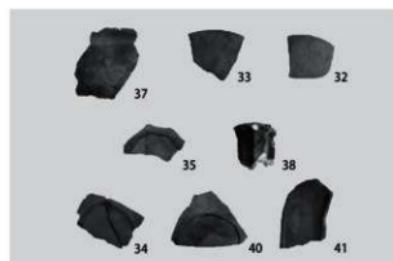
掘立柱建物 4 出土 磁板転用須恵器甕



a区中央柱穴群出土 砧石



掘立柱建物 7 出土 凝灰岩切石



a区中央柱穴群出土 土師器・黒色土器



223 溝出土 土師器皿



223 溝出土 土師器皿



223 溝出土 土師器皿



223 溝出土 土師器椀



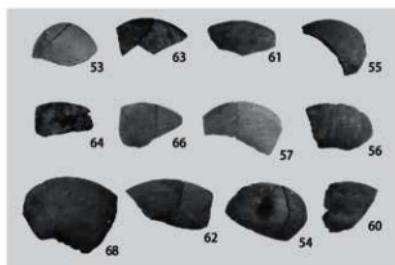
223 溝出土 土師器椀



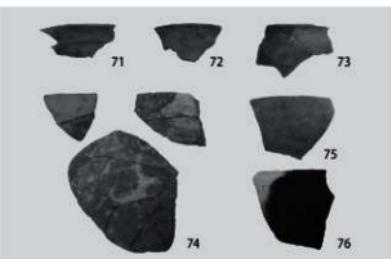
223 溝出土 黑色土器 A 類椀



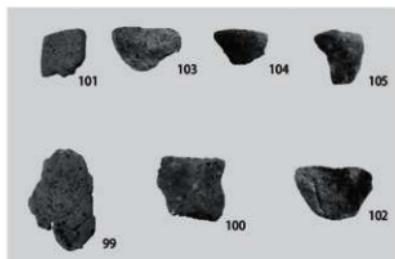
223 溝出土 土師器皿・椀・鉢



223 溝出土 土師器皿・椀



223 溝出土 土師器皿・鉢



223 溝出土 製塙土器



223 溝出土 須恵器瓶子 87



223 溝出土 須恵器瓶子 88



223 溝出土 須恵器瓶子 90



223 溝出土 須恵器瓶子 (88) 底部の糸切痕



223 溝出土 須恵器瓶子 91



223 溝出土 須恵器壺 92



223 溝出土 須恵器水滴 94

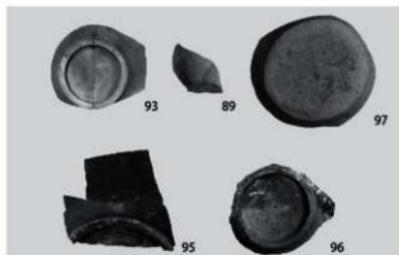


223 溝出土 須恵器甕 98

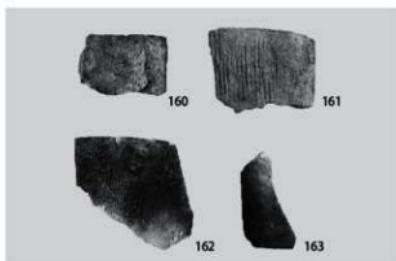
圖版 20
223 溝
533 出土遺物



223 溝出土 須恵器蓋・杯



223 溝出土 須恵器瓶子・壺



223 溝出土 瓦



533 溝出土 土師器皿



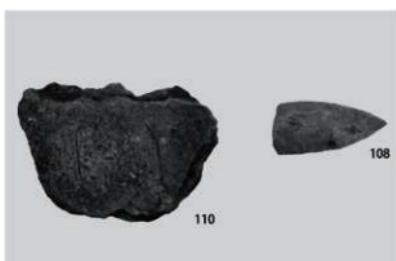
109

533 溝出土 土師器鉢



107

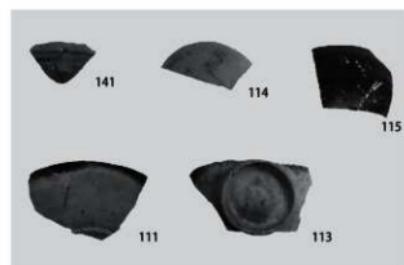
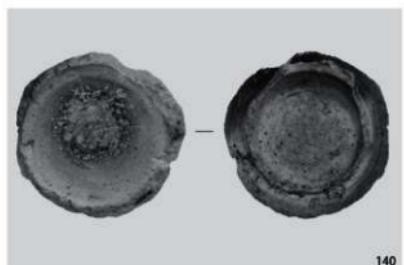
533 溝出土 土師器皿



533 溝出土 弥生土器・土師器皿



533 溝出土 弥生土器 (110) の粉圧痕

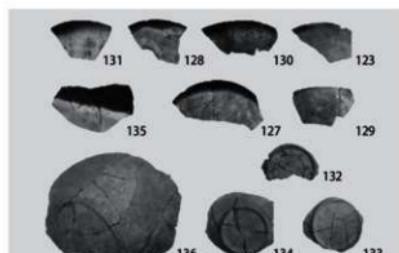
326 井戸出土 瓦器椀
112254 土坑出土 瓦器椀
116326・433 井戸・255・439 土坑出土
土師器・須恵器・黒色土器・瓦器
111 112 113 114 115434 土坑出土 須恵器鉢転用碗
140434 土坑出土 土師器椀
118434 土坑出土 土師器椀
120434 土坑出土 土師器椀
125434 土坑出土 土師器椀
126

326
•
433
井戸
•
254
•
255
•
434
•
439
土坑
出土
遺物

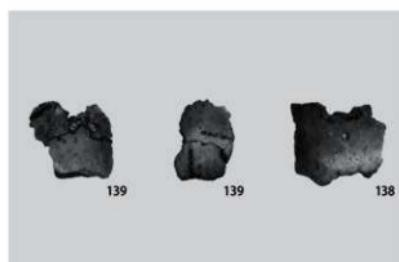
圖版
22
404
•
434
•
534
土坑
•
小溝群
出土遺物



434 土坑出土 土師器



434 土坑出土 土師器・黑色土器



434 土坑出土 鞘羽口



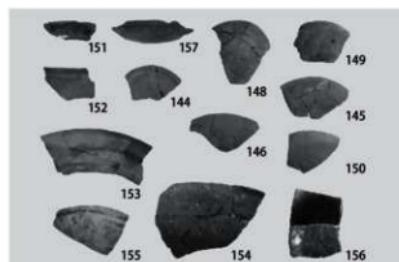
404 土坑出土 弥生土器



534 土坑出土 須恵器器蓋



小溝群 E 出土 土師器小皿



小溝群 B・C・E・F 出土 土師器・須恵器・瓦器



小溝群 E 出土 土師器皿

報告書抄録

松原市文化財報告 第6冊

池内遺跡 2

松原市天美東4丁目地内における店舗建設工事に伴う

池内遺跡C2-4-7発掘調査報告書

【発行年月日】 令和2年（2020）3月31日

【編集・発行】 松原市教育委員会

〒580-8501 大阪府松原市阿保1丁目1番1号

【印刷・製本】 能登印刷株式会社

〒920-0885 石川県金沢市武藏町7番10号

池内遺跡
(所在地:人間村柏原市天王堂)